

第一 章 緒 言

輓近文化の進展に伴ひ、我が國各都市の膨脹發展は實に驚嘆すべきものがある。殊に阪神地方は地理的恩恵と、各種施設の整備とに依り、大大阪市を初めとし神戸市、尼崎市並に西宮市等は勿論阪神地方全体に亘り、飛躍的進歩發達を促し、名實共に實に我國產業の大中心地を形成し、今後益々發展の途上にあり。

此處に於て阪神地方の交通問題の解決は、其の重要性に於て、其の特異性に於て、將又其の緊急性に於て、到底他地方の追従し難き重大案件である。現在阪神地方の交通機關としては、鐵道、軌道、道路、海上輸送等が其の主なるものであるが、是等各種交通機關の消長に稽へ將來をトする爲、先づ以て鐵道輸送、輸送の一班を見るに、第一表及第二表に示す如く、神戸港の臨港鐵道湊川貨物驛、小野濱貨物驛に於ける取扱貨物は

第一表 湊川驛

年次	發送	到着	合計
昭和三	四〇一、七七四 <small>噸</small>	三一五、三四三 <small>噸</small>	七一七、一一七 <small>噸</small>

昭和五 昭和一〇 昭和一二(前半)	二七三、一八四 二三〇、六〇八 六七、四九五	二五九、七七二 三七六、七三三 九一、五七三	五三二、九五六 六〇七、三四一 一五九、〇六八
昭和一 昭和五 昭和一〇 昭和一二(前半)	二七六、五二八 一九七、二七五 一九九、二二四 七三、四七七	一七六、一六九 一三一、六六七 二三五、八〇五 四七、六二五	四五二、六九七 三二八、九四二 四五五、〇二九 一一一、一〇二
大正一 大正六 大正二 昭和一 昭和六 昭和一三	一、七九六、三二〇 一、六八九、五一 一、〇〇三、八二二 七六七、五四六 五一四、三九九 五八五、七七五	一、七九六、三二〇 一、六八九、五一 一、〇〇三、八二二 七六七、五四六 五一四、三九九 五八五、七七五	一、七九六、三二〇 一、六八九、五一 一、〇〇三、八二二 七六七、五四六 五一四、三九九 五八五、七七五

にして近年に至り著しく減少の趨勢を示す、今又昭和十年度神戸港取扱輸移出入貨物總額は一五、一九三、五二九噸であつたが、湊川、小野濱、神戸港、新川、和田岬、兵庫、兵庫港等の神戸港内の各貨物驛で取扱つた貨物總噸數は、一、七二四、二六三噸であつて、僅に其の一 $\frac{1}{10}$ %に過ぎぬ。今後共漸減の趨勢にあるが如し。大阪港に於ても同様の事實が極めて明瞭に現はれて居る。

次に阪神間船輸送に就て見るに、第三表に示す如く、

第三表

年 次	噸 數
大正一	一、七九六、三二〇
大正六	一、六八九、五一
大正二	一、〇〇三、八二二
昭和一	七六七、五四六
昭和六	五一四、三九九
昭和一三	五八五、七七五

大阪港、神戸港の取扱貨物が年と共に躍進的に増加するにも拘はらず、船輸送は年と共に減少の傾向にある。之等は謂ふ迄もなく阪神國道が阪神間運輸交通に對し新しき重大なる役割を果しつゝある事を示すものである。

現在の阪神國道は昭和二年に竣工したものであつて、起點は大阪市此花區上福島二丁目、終點は神戸市灘區岩屋、此の間延長二六・六八八糎で、兵庫縣側一二・二三六糎、大阪府側四・四五二糎車道幅員は一九米乃至二〇米、中央に五・四五米の複線軌道敷（阪神國道電車）を有し、歩道は各

兩側各々三・六四米を有する。鋪裝の種類は大阪府側は總て「トペカ式アスファルトコンクリート」鋪裝、兵庫縣側は大半「フーレナイトビチユリシック」鋪裝を以て施工し、唯都賀川より以西神戸市灘區岩屋に至る間のみは「ロックアスファルトブロック」を以て鋪裝を行つた、實に近代的道路である。之に反して舊國道は全線を通じて、幅員は僅に二間、廣い部分でも三間を出ない許りか、屈曲は甚しい昔のまゝの田舎道で、殊に大阪市西淀川區姫島町、大和田町地内、尼崎市本町通、西宮市今津町地内、武庫郡本庄村青木地内の如きは特に狹隘にして屈曲著しいのであるが中でも尼崎市内本町通の如く人家連擔せる市街地内は後章詳述する如く人、馬車等の往來雜沓甚しく、自動車の通過行違ひに非常に困難を感じる惡道路である。而も舊國道には第四表に示す如き鐵道、軌道との平面交叉六箇所の關所を通過せねばならぬ危險がある。

第四表

番號	交 叉 管 所	交 叉 種 類	踏 切 施 設
一	大阪市西淀川區佃町六丁目	阪神電車傳法尼崎線	遮斷機警報機附
二	尼崎市南城内	省線尼崎線	遮斷機警報機附
三	尼崎市玄番南之町	阪神電車大阪神戸線	遮斷機警報機附

四	兵庫縣武庫郡鳴尾村甲子園	阪神國道電車甲子園線	踏切施設ナシ
五	西宮市今津町	阪急電車今津線	遮斷機警報機附
六	西宮市今津町	阪神電車大阪神戸線	遮斷機警報機附

舊國道は上述の如き状況であつたから、新國道の出現は阪神間交通に一大革命を來たしたもので其の効果は實に想像以上のものであつた。よつて後章に於て、新舊兩國道の交通量を検討し、新國道の効果を説明し、尙進んで新國道開通に依り一大躍進を遂げつゝある阪神地方各般の情勢に言及して、將來に於ける阪神間道路交通の進むべき道を示唆せんとするものである。

第二章 阪神國道に於ける交通量の問題

第一節 舊國道の許容交通量と新舊兩國道の交通量比較

本節に於ては舊國道が如何に交通許容量に乏しく、又如何に高速車輛の運行に不適當なるかを述べんとするものである。

先づ自動車交通に就て述べる。昭和十二年度、昭和十三年度並びに昭和十四年度に於ける新舊國道の交通調査の成果を見るに第五表乃至第十表の如し。

(一) 昭和十二年 自九月二十九日 至十月一日 交通情勢調査

(a) 新國道
観測地點 (1) 兵庫縣尼崎市梶ヶ島左門橋北詰
(2) 兵庫縣武庫郡本山村中野

第五表

観測區間	観測地點	自用			貨物	計
		乗	合	動		
自大阪府	尼崎市梶ヶ島左門	上り	一、九四一	一八四	二、五五二	四、六七七
至尼崎市玉江橋	橋北詰	下り	一、九八二	一九〇	二、五六三	四、七三五
自西宮市產所町	武庫郡本山村中野	計	三、九二三	三七四	五、一一五	九、四一二
至武庫郡御影町	字千田	下り	八二一	一七二	一、七二四	二、七一七
		計	八一二	一七六	一、七三六	二、七二四
		一、六三三	三四八	三、四六〇	五、四四一	九、四一二

(観測の結果はすべて三日間の一日平均を以て示すものとす。)

(b) 舊國道

観測地點 (1) 尼崎市東本町一丁目

(2) 武庫郡大庄村東新田

(3) 武庫郡精道村芦屋永保橋

第六表

観測區間	観測地點	自用			貨物	計
		乗	合	動		
自大阪府界	尼崎市東本町一丁目	一	三	一	一	一
至尼崎市	武庫郡大庄村東新田	一五四	四八	一	一	一
自尼崎市	武庫郡大庄村東新田	九二	一二一	一	一	一
至西宮市	武庫郡精道村芦屋永保橋	一四四	三六七	一	一	一
自西宮市	武庫郡精道村芦屋永保橋	八二	三二二	一	一	一
至御影町	武庫郡精道村芦屋永保橋	九六	三二二	一	一	一

(掲げたる数字は上り下りを合計したものとす)

(二) 昭和十三年 自十月十三日 至十月十五日 交通情勢調査

(a) 新國道

第七表

觀測區間 自大阪府界 至尼崎市昭和通	觀測地點 尼崎市梶ヶ島町左 門橋北詰	觀測地點 尼崎市梶ヶ島町左 門橋北詰
至御影町市郡界	武庫郡本山村中野 字千田	武庫郡本山村中野 字千田
自西宮市產所町 至御影町市郡界	武庫郡本山村中野 字千田	武庫郡本山村中野 字千田
自大阪府界 至尼崎市昭和通	尼崎市梶ヶ島町左 門橋北詰	尼崎市梶ヶ島町左 門橋北詰
計下上	計下上	計下上
九〇五 四五六	二、三四二 一、一七一	八八九 四三五
三二六	三四〇 一六五	三三八 一七〇
二、九八八 一、四七六	四、四七三 二、二二〇	五、一四〇 二、五四〇
四、二一九	七、一五五 三、五五六	六、三六七 三、一四五
	計	計

八

第八表

觀測區間 自大阪府界 至尼崎市	觀測地點 尼崎市南城内	乘用 自 動 車	乘用 自 動 車	合 貨 物	計
至御影町	武庫郡大庄村 東新田	一四三	八二		
自西宮市 至御影町	武庫郡精道村芦屋	三九	二		
自尼崎市 至尼崎市		一八四	七一		
至		二〇三	一五五		

(b) 舊國道

(三) 昭和十四年 自五月十八日 至五月二十八日 交通情勢調査

第九表

觀測區間 自大阪府界 至尼崎市昭和通	觀測地點 尼崎市梶ヶ島左門 橋北詰	觀測地點 武庫郡本山村中野 字千田	觀測地點 武庫郡本山村中野 字千田	觀測地點 武庫郡本山村中野 字千田
計下上	計下上	計下上	計下上	計下上
九〇五 四五六	二、三四二 一、一七一	一、一七一 一七五	一、一七一 一六五	一、一七一 一六五
三二六	三四〇 一六三	三四〇 一六三	三四〇 一六三	三四〇 一六三
二、九八八 一、四七六	四、四七三 二、二二〇	四、四七三 二、二二〇	四、四七三 二、二二〇	四、四七三 二、二二〇
四、二一九	七、一五五 三、五五六	七、一五五 三、五五六	七、一五五 三、五五六	七、一五五 三、五五六
	計	計	計	計

九

(b) 舊國道

第十表

觀測區間	觀測地點	乘用	自動	車	貨物	計
自大阪府界 至尼崎市	尼崎市南城内	四二	四六	一五九	二四七	
自尼崎市 至西宮市	武庫郡大庄村 東新田	五九	○	七九	一三八	
至御影町	武庫郡精道村青屋	四六	三	一五	六四	

右の諸表を通覽するに、自動車は大半新國道を通過する事明白なるも、尙舊國道と言へども相當數の自動車が現に往來して居る事が判る。

今舊國道の許容交通量を検討せんとするに當り、舊國道の難所たる尼崎市内にては、道路の兩側に電柱林立して有効幅員を狭め、剩へ沿道の店舗は日覆に又は商品に道路の占用を敢てし、益々道路の有効幅員を縮小せる箇所あり。從て尼崎市内の如き交通困難なる地區に依つて交通許容量が決定せられるものと考へなければならない。尼崎市内交通觀測地點に於ける自動車交通量を第六表、

第八表、第十表より摘錄すれば第十一表の如し。

第十一表

觀測地點	觀測年月日	道路狀況			貨物	車	計	摘要
		乘用	自	動				
尼崎市東本町 一丁目七	昭和十二年 九月二十九日 至十月 一九日	砂利道路面凸凹著 し。 幅員四・五米	三	四八	二	五三	昭和十三年度 に於て「シ ート、アスファ ルト」にて鋪	
尼崎市南城内 八二番地	昭和十三年 十月十五日 至五月二十八日 昭和十四年 五月二十九日 至五月二十九日	「シート、アスフ ルト」一路面良好 幅員四米	四二	四六	一八四	二七三		
全 上	全 上	四二	四六	一五九	二四七		裝せり	

(車數は觀測三日間の一日平均)

即ち右表による時は昭和十三年十月に於けるものの數量最大にして一日二七三臺を數ふ。然るに此の道路は自動車の外に人、馬車、自轉車の往來頗る多し。因つて交通混雜の程度より自動車の許容交通量を推定せんが爲、尼崎市内舊國道に於て、自動車による通過時間試験を行つた結果を示せば第十二表乃至第十六表の通りである。

試験車大七八三號（ナッシユ一九三六年型）試験區間は尼崎市東本町辰巳橋西詰より全市西本町貴布禰神社前間一、九七〇米とす。試験の方法は晝間街路の雜沓しつゝある際自動車を乗り入れ試験

區間を通過するに要する平均時速を求め、自動車の「チエンジレバー」による「ローギヤー」、「セコンド、ギヤー」、或は「ストップ」の回数及時間により雜沓の状況を知らんとしたものである。

第十二表 往路 辰巳橋西詰より貴布禰神社前に至る。

日	時	刻	所要時間	延長	平均時速
昭和十五年 二月一日	自午後二時二八分 至午後二時四〇分		一一分五秒		

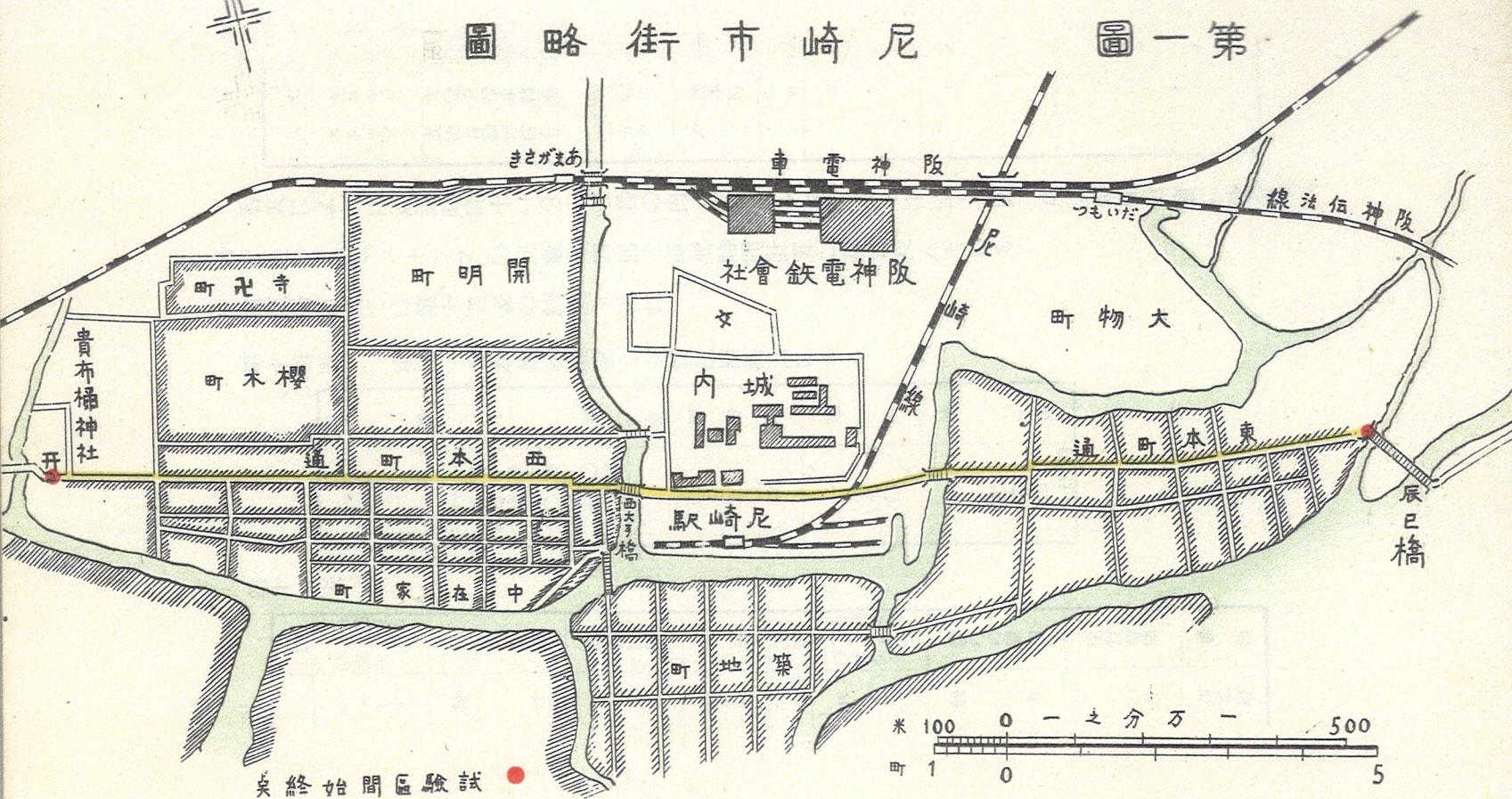
備考 道路幅員五・五米乃至四米、シートアスファルト鋪装

第十三表

番號	「自動車の種別」 〔ギヤー〕	徐行の原因	徐行時間	場所	番號	「自動車の種別」 〔ギヤー〕	徐行の原因	徐行時間	場所
一 二 三 四 五	セコンド ストップ セコンド セコンド ストップ	雜沓 雜沓 雜沓 雜沓 雜沓	三〇秒 二〇ク 五ク 二三ク 五ク	東本町 城内 一〇九 セコンド 雜沓	番號	「自動車の種別」 〔ギヤー〕	徐行の原因	徐行時間	場所
一 二 三 四 五	セコンド ストップ セコンド セコンド ストップ	雜 雜 雜 雜 雜	五秒 五ク 二〇ク 八ク	西本町	番號	「自動車の種別」 〔ギヤー〕	徐行の原因	徐行時間	場所

尼崎市街略圖

第一圖



試驗區間始終

六	ス ト ッ プ	荷馬車追行待合	二八
七	セ コ ン ド	貨物自動車待合	一二〇ヶ
八	ス ト ッ プ	貨物自動車待合	二五ヶ
		西本町	一四
		西本町	一五
		西本町	八ヶ
		西本町	一〇ヶ
		西本町	八ヶ

右表によれば通過時間十一分〇五秒の内、「セコンド、ギヤー」十一回、所要時間計實に四分十一秒であつて、「ス ト ッ プ」の回數も四回、所要時間計五二秒に及んでゐる。

尙復路に於ては第十四表の結果を得た。

第十四表 復路 貴布禰神社前より辰巳橋西詰に至る

日	時	刻	所要時間	延長	時速
昭和十五年 二月 一日	自午後三時二〇分 至三時三〇分五〇 秒	一〇分五〇秒	一九七〇米	一〇・九一 糸/時	

第十五表

番號	「自動車の種別」	徐行の原因	徐行時間	場所	番號	「自動車の種別」	徐行の原因	徐行時間	場所
一 セ コ ン ド	雜 沓	一一秒	西本町	二	口 一	雜 沓	一〇秒	西本町	

即ち「ローギヤー」四回、所要時間計三九秒、「セコンド、ギヤー」十回、所要時間計一分五七秒、「ストップ」三回、所要時間計三五秒を示した。又此の試験區間通過中出會又は追抜いた自動車、自轉車、牛馬車、荷車の數を擧げて参考に供すれば第一六表の如し。

第一六表

車輛種別	往路
小型自動車	三七台
四夕	五六台

荷馬車	一ヶ	一ヶ	一ヶ
自動車	一ヶ	一ヶ	一ヶ
自 動 車	一ヶ	一ヶ	一ヶ
合 乘	一ヶ	一ヶ	一ヶ
計	一ヶ	一ヶ	一ヶ

右二回の試験に依つて見るに、尼崎市内を通過する際の自動車の平均時速は一〇糠内外であり、各「ギヤー」の回數、徐行時間、「ストップ」の回數、時間等より見て尼崎市内の交通は今日已に飽和状態なる事が察せられる。前記試験の際、尼崎市内通過に要した約一〇分間に於て三台の自動車の行違あり、往復として考ふれば一〇分間に六台、一日一四時間と見れば一日五〇四台となる勘定であるから、舊國道の許容自動車交通量は一日先づ五〇〇台と推定して良いと思ふ。

第一七表

觀測地點	觀測年月日	步行者	人力車	自轉車	荷車	牛馬車	自動車
尼崎市東本町 一丁目七	昭和十二年九月二十九日	一、九三三	七	二、七一九	七二	三	六
	至一月一日						

尼崎市南城内八 二番地	自十月十三年 至十月十五日	九、七三八	一二	三、八八七	八三	一四七	一六八
全 上	自五月十八日 至五月二十日	八、五二〇	一四	四、九六七	一一九	一五七	一四一

(前記数字は観測三日間の一日平均を示す)

次に比較の便宜上、新國道尼崎市梶ヶ島交通觀測所に於ける人、馬車、自轉車の通過量を擧ぐれば第一八表の如し。

第一八表

観測地点	観測年月日	歩行者	人力車	自轉車	荷車	牛馬車	自轉動
尼崎市梶ヶ島町 左門橋北詰	昭和十二年 自九月廿九日 至十月一日	三、五一五	一	六、三六〇	五、九七二	五九	五六
全 上	昭和十三年 自十月十三日 至十月十五日	一、六一八	○	一二、三三二	一一五	一二一	一二九
	計 下 上	三、六二九	五、一三三	五、四〇八	五、二五八	九九	一、三六四
	六、〇〇三	一、八七八	五、五〇七	一〇、六六六	一〇二	八六	一、三五四
	二、八三九	一、八七九	○ ○ ○	一〇、六六六	五一	二四〇	一、二七三
	三、一六四	七、〇八三	一〇	一一五	九九	一、二七三	一、二九
	四 四	六、七九六	一一〇	一二五	八六	二七一	一、三九八
	三八六	一、八七九	七八	二四	二八五	二、六七一	二、七一八
全 上	自五月十八日 至五月二十日	二、八五	一四一	一四四	三、四三七	一、七三九	一、六九八
	計 下 上	一、八八	一四四	一四四	一、七三九	一、七三九	一、六九八
	六八〇	二	二	二	二	二	二
	九七二	三六	三六	三六	三六	三六	三六
全 上	自五月十八日 至十月十五日	一、九四八	一、九四八	一、九四八	一、九四八	一、九四八	一、九四八
	至十月二十八日	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四	一、七〇四
	至十月二十九日	一、二四二	一、二四二	一、二四二	一、二四二	一、二四二	一、二四二
	至十月三十日	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇
	至十月三十一日	七九	七九	七九	七九	七九	七九
	至十一月一日	三五	三五	三五	三五	三五	三五
	至十一月二日	とす	とす	とす	とす	とす	とす

観測地点	観測年月日	歩行者	自轉車	荷車	牛馬車	自轉動
尼崎市東本町 一丁目七番地	昭和十二年 自九月廿九日 至十月一日	三八六	六八〇	六、七九六	一、七三九	一、六九八
尼崎市南城内 八二番地	昭和十二年 自九月廿九日 至十月一日	一、九四八	九七二	四二	二	二
全 上	自五月十八日 至五月二十日	一、七〇四	一、九四八	一、九四八	一、九四八	一、九四八

今第一七表と第一八表とに就き、荷、馬車及自轉車の一車線當り占用幅を夫々二米及一米、步行者一人の占用幅を〇・七五米とし、各一車線當りの通過量を示して見る。

(a) 舊國道

第一九表

観測地点	観測年月日	歩行者	自轉車	荷車	牛馬車	自轉動
尼崎市東本町 一丁目七番地	昭和十二年 自九月廿九日 至十月一日	三八六	六八〇	六、七九六	一、七三九	一、六九八
尼崎市南城内 八二番地	昭和十二年 自九月廿九日 至十月一日	一、九四八	九七二	四二	二	二
全 上	自五月十八日 至五月二十日	一、七〇四	一、九四八	一、九四八	一、九四八	一、九四八

第二〇表

一八

観測地點	観測年月日	歩行者	自轉車	荷車	牛馬車	自轉車動	備考
尼崎市梶ヶ島町左門橋北詰	昭和十二年九月廿九日至十月一日	五一三	一〇二八	一九	四〇	二二七三	人道巾員 七・二八米
全上	昭和十三年十月十三日至十五日	五五一	八八八	一七	三一	二七三	(除軌道員) 一三・六米
全上	昭和十四年五月十八日至五月二十日	六〇〇	一一五六	三二	四八	二八六	

即ちこの二表を通覽するに一車線當りの人、荷車、自轉車等の交通量は總て舊國道の方が新國道より遙かに大きい事が判る。ただ自動自轉車數量のみは新國道の方が大きい。之はやはり新國道の特異性の然らしむる處であらうと考へられる。

今新舊兩國道に於ける此等一車線當り通過量の比率を求むるに、昭和一二年九月の調査に就ては舊國道の步行者は新國道の〇・七五倍、自轉車は〇・六六倍、荷車、牛馬車は〇・六四倍に過ぎない事となつて居るが、昭和十三年十月の調査を見るに、兩國道ともすべて通過數增加して居るにも拘らず、しかも舊國道は新國道に比し步行者實に三・五四倍、自轉車一・一一倍、荷車、牛馬車二・四二倍の多きを示し、昭和十四年五月の調査に就て見ても、舊國道の步行者は新國道の二・八四倍、自

轉車は一・〇七倍、荷車、牛馬車は一・七六倍と言ふ數値を示して居る。その上舊國道は新國道とは異なり、步行者を分離しては居ないのであるから、舊國道が尼崎市内に於て如何に雜沓輻輳して居るか想像に余りあるのである。

次に自動車の一車線幅を三米とし、尼崎市内新舊兩國道交通觀測所に於ける一車線當り自動車通過量を算出比較すれば第二一表の通りである。

第二一表（尼ヶ崎市）

観測年月日	道路別	観測地點	自				合計
			乗用	乗合	自動	車	
昭和十四年五月二十八日	新國道	梶ヶ島左門橋北詰	五四三	八六	一〇七二	一七〇一	
	舊國道	南城内八二	四三	四六	一八四	二七三	
			五八六	八五	一、一八	一、七八九	
					一五九	二四七	

即ち昭和一三年一〇月の調査より、新舊兩國道の自動車の一車線當り通過量を比較すれば、新國道は舊國道に比し乗用車に於て一二・六三倍、バスは一・八七倍、貨物自動車は五・八二倍と云ふ數値を示し、昭和十四年五月の調査に就ては一車線當り新國道は舊國道に比し、乗用車にて一三・

九五倍、バス一・八五倍、貨物自動車は七・〇三倍と云ふ著しい對比を示し、「新國道なかりせば」今日の運輸交通上の利便は到底舊國道にては夢想だに及ばぬ事柄であらう。

二〇

第二節 新國道に於ける交通量の消長

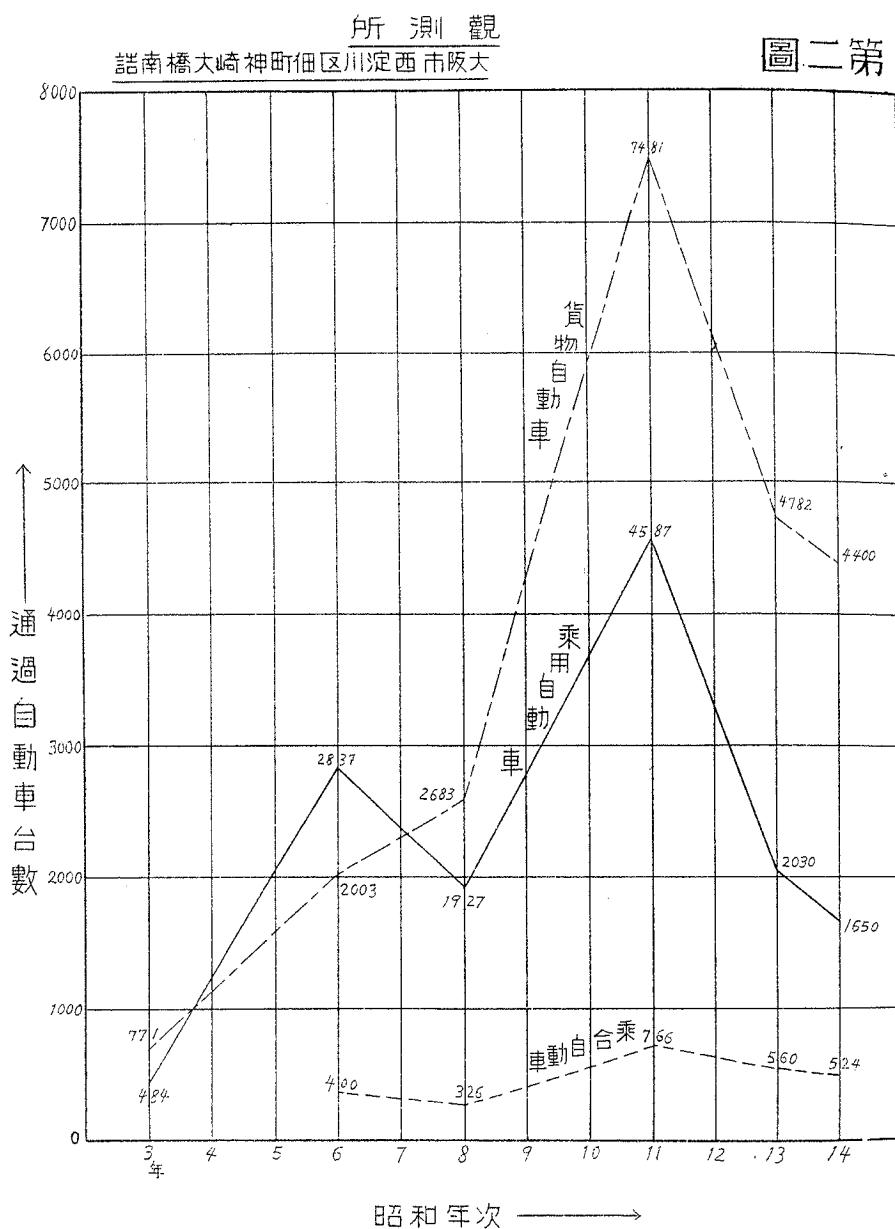
次に新國道に於ける交通量の消長を調査した其の結果を述べる事とする。

之に就ては阪神國道中交通量の最も大きい大阪市内、及大阪市内に最も近い地点に於ける調査を規準とするのが適當である。因つて大阪市西淀川區佃町神崎大橋南詰、及尼ヶ崎市梶ヶ島町左門橋北詰に於て觀測した自動車台數の年別消長を二圖、三圖に示した。

觀測年月日を示せば第二二表の如し

第二二表

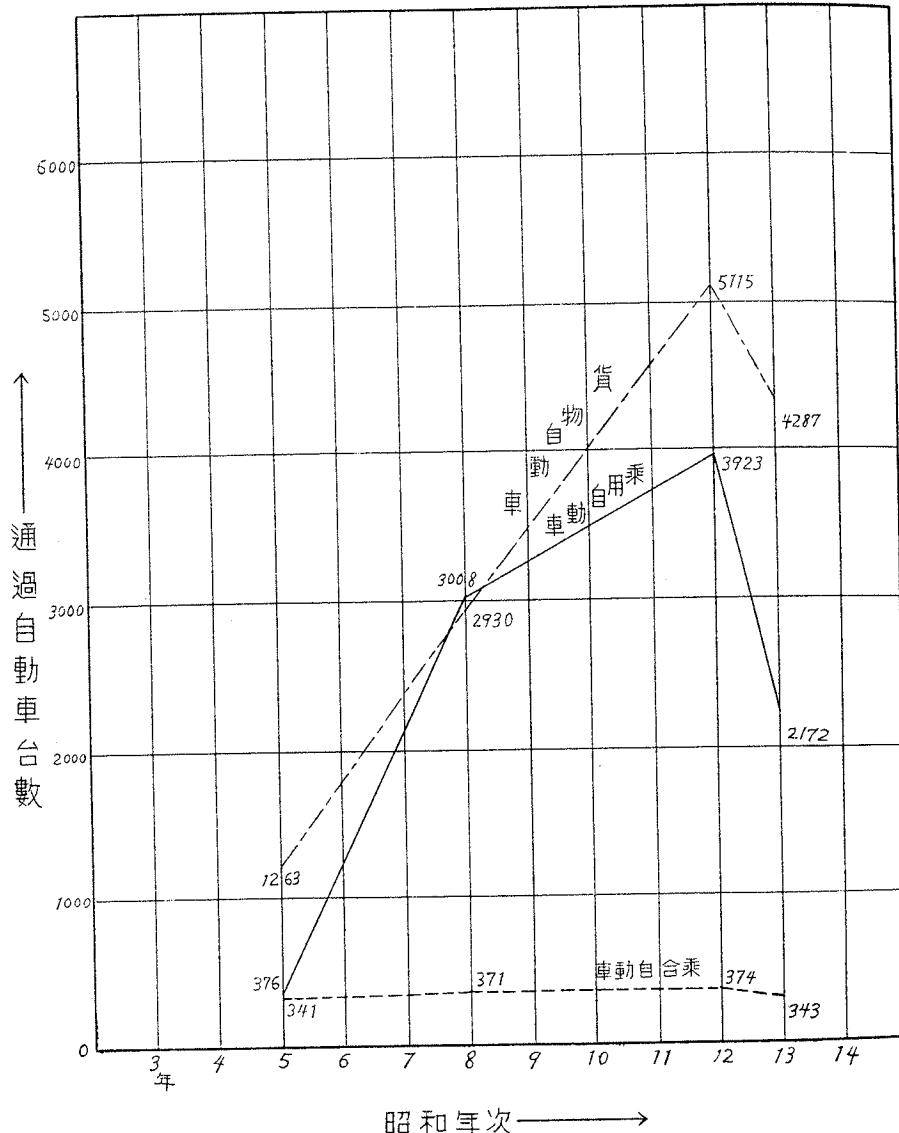
年 次	月	日	觀 測 時 間
昭和六年	至 八月十八日	自 十月二十五日 二十七日	尼ヶ崎市梶ヶ島町左門橋北詰
昭和五年	至 三月十四日	自 三月十二日	大阪府一兵庫縣
昭和三年	午前六時—午後八時	午前六時—午後八時	午前六時—午後八時



自 動 車 過 通 數 累 年 比 較 表

尼崎市樺島龍門橋北號所測觀

圖三第



表較比年累數過通車諸

所測観

諸南橋大崎神町佃区川淀西市阪大

圖四第

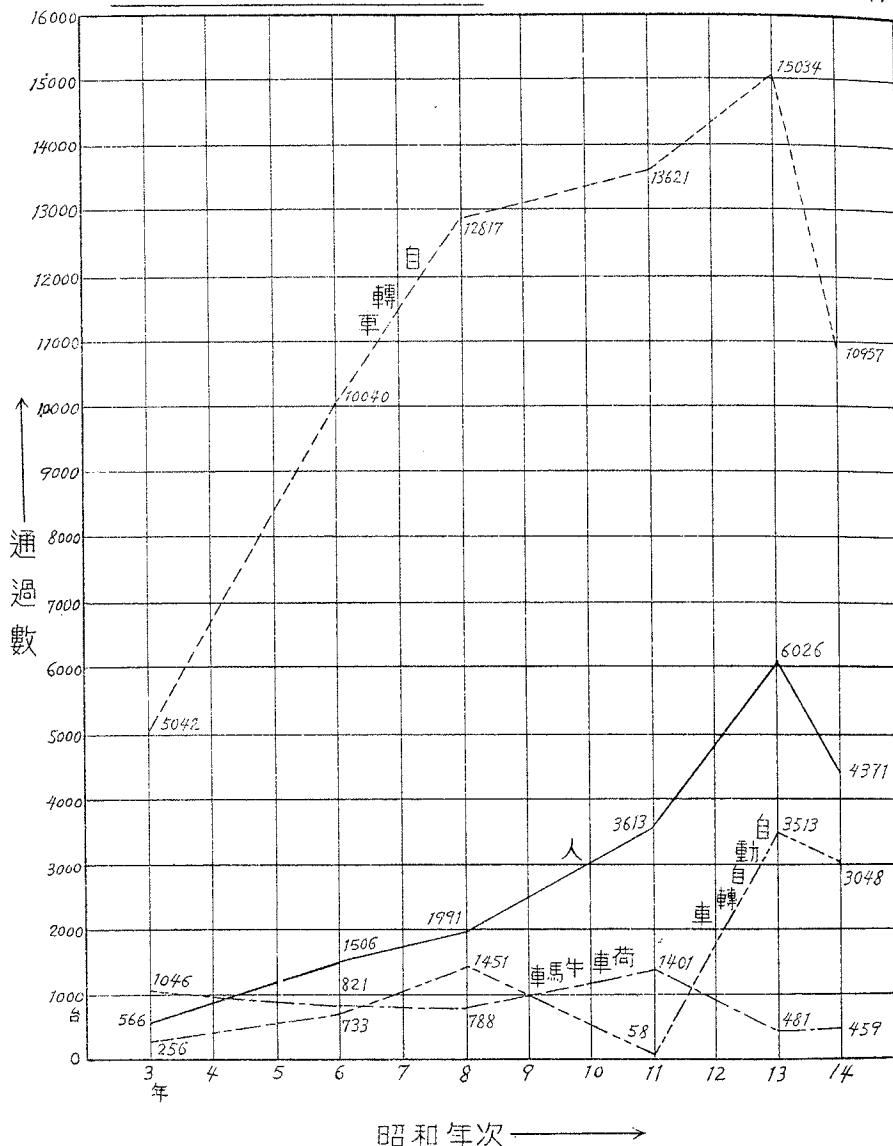
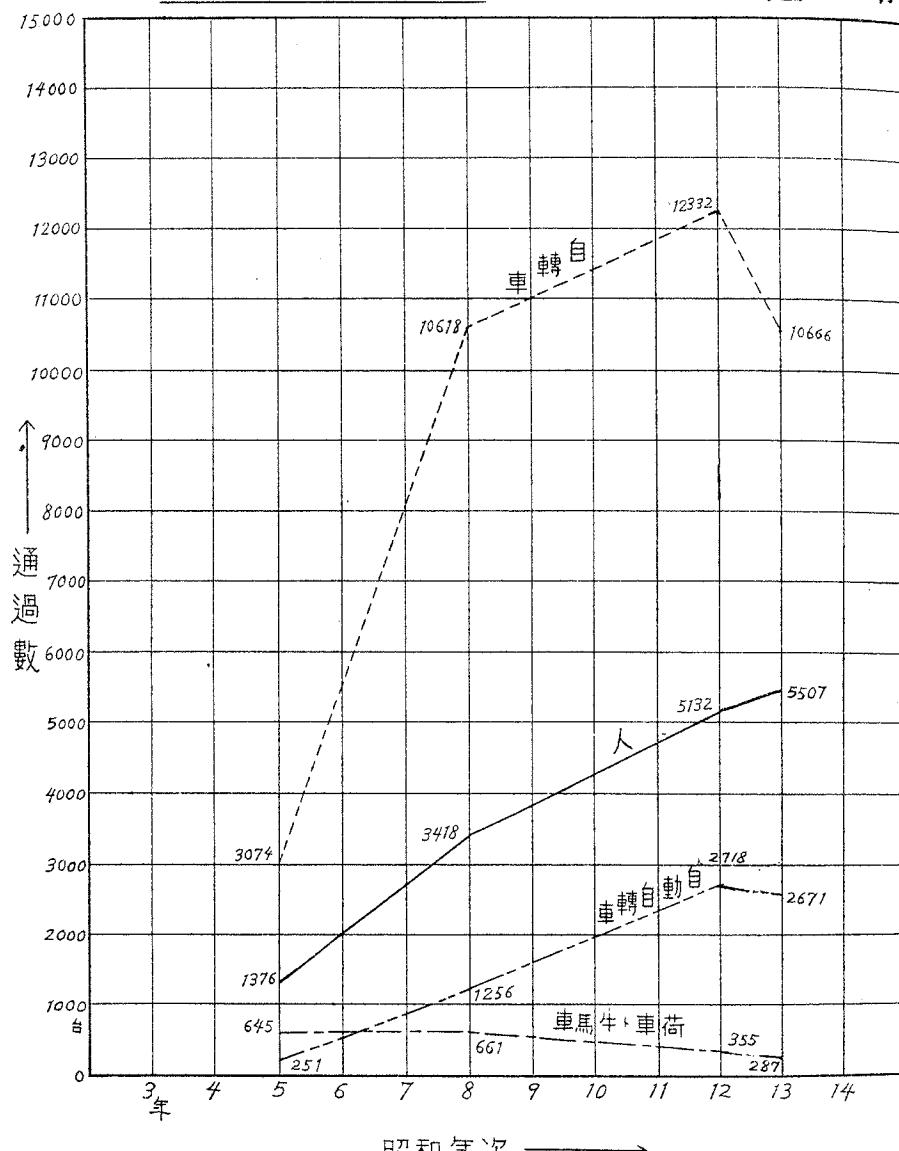


表 較比年累數過通車諸

戶 濱 川 觀

諸北橋門左島樺市崎尼

圖五第



昭和年次 →

昭和八年		至自六月一日		午前六時—午後八時		午前六時—午後八時	
ク十一年		至自十一月五日		自六月三日乃至十月三日		自六月一日乃至十月一日	
ク十二年		自六月至十二月三十日		至十月二十九日		午前〇時—午後三時	
ク十三年	白 毎月 月中旬 一月至 五月 毎月 月中旬 三日観測	自 六月至 十二月 三十日	自 十月十三日	自 十月十五日	午前五時—午後九時	全	全
ク十四年	自 五月十八日	至 五月二十一日	午前七時—午後七時	午前七時—午後七時	全	全	全
(二圖、三圖、四圖、五圖、に掲げたる数字は前表の日數の一日平均である)							

二圖、三圖を見るに乗用自動車、貨物自動車共にその通過量は昭和三年より昭和十一年乃至昭和十二年に至る間非常な増加の趨勢にある事が判る。乗合自動車の通過量が年別に殆んど差の無いのは定時運轉を爲すに依るものにして、尼崎以西神戸市に入るまで新國道上唯一の乗合自動車たる阪神國道バスが最近一日に一五〇乃至一七〇の運轉回數を有する事も第五表、第七表、第九表に明らかに現はれてゐる。昭和十三年以降は乗用自動車、貨物自動車共通過量著しく減少の傾向を示す。

昭和三年以降昭和十二年に至る通過自動車數の増加は阪神地方の産業の急速なる發展による事は論を俟たぬが又一面我國自動車工業の急激なる發展に依るものなる事も見逃し難き事實である。

今國產自動車の生産狀況及外國車輸入狀況を見れば、

第二三表

本邦自動車生産輒數

年次	生産輒數
昭和六年	四三四
七年	八四〇
八年	一、六一二
九年	二、四四三
十年	五、三五五
十一年	九、一四九

(自動車便覽)

第二四表

外國自動車輸入組立輒數 (フォード社、ゼネラル、モータース社及共立自動車製作所)

年次	輸入組立輒數
昭和七年	一四、〇八七
八年	一五、〇八二
九年	三三、四五八
十年	三〇、七八七
十一年	三〇、九九七

(自動車便覽)

以上の兩表を見るに國產自動車、外國自動車共に孰れも最近益々多く生産され又は輸入せられてゐるのであつて、國產自動車生産増加の割合が最近特に著しい事が知られる。しかも昭和十一年までの第二四表によれば、外國自動車の輸入が國產車生産數に比して非常に大きい數量を示してゐる事も注目すべき事である。

尙阪神地方に籍を有する自動車數を昭和三年、昭和十年に就て比較して見てもその增加の著しい事が知られる。

第二五表

所在地名	昭和三年		昭和十年	
	乗用自動車	貨物自動車	乗用自動車	貨物自動車
大阪市	三、九六九	九三八	四、二五五	三、六九一
神戸市	八四三	二九五	一、一六〇	九二九
三三				

昭和十一年、十二年以降自動車通過台數の遞減は事變下ガソリン消費制限、その他經濟界の蒙つた各種の制扼によるものと信せらる。

次に人、自轉車、自動自轉車等の通過數の消長を見ても最近その増加は著しい。その内牛馬車（荷車を含む）のみ漸減の傾向を示すのは自動車の増加と比較して興味深い。

第三節 新國道の許容交通量

次に新國道の許容交通量に考へを及ぼして見たい。先づ神崎大橋南詰に於ける交通調査に於て、換算重量、占用値を各種車輌に就き總計したるものを作成したるものを第二六表に舉ぐれば、

第二六表

觀測位置 大阪市西淀川區佃町神崎大橋南詰

觀測年月日	換算重量	占 用 値	一 車 線 當 り		備 考
			換算重量	占 用 値	
昭和三年十月二十五日	二、四七二	一一、四八三	六一八	二、八七一	
昭和六年八月十八日	七、四四四	一九、一〇一	一、八六一	四、七七五	軌道敷を除き四車線とす。
昭和八年六月三日	八、六九〇	二〇、九一四	二、一七三	五、三三五	(歩行者は除外す)
昭和十一年十一月七日	二一、三四一	三三、六八〇	八、四二〇	六、三六六	
昭和十三年六月三日観測	一三、六九三	二五、四六四	三、四二三	五、四六六	
昭和十四年一月三日観測	一二、一九	二一、八六五	三、〇三〇		

そして又新國道武庫郡本山村中野に於ける交通調査に依つて知り得たる換算重量、占用値を示せば、

第二七表

觀測位置	兵庫縣武庫郡本山村中野千田
觀測年月日	換算重量 一 車 線 當 り 備 考

昭和五年	自三月十三日 至三月十四日	四、七九三	八、二五六	一、一九八
昭和八年 自六月一日 至六月三日	昭和十二年 自十月一日 至十月三日	均平	七、一六四	一二、九八八
昭和十三年 自五月十八日 至五月二十日	自九月二十九日 至十月一日	九、〇四五	一三、七〇四	一、七九一
昭和十三年 自十月十三日 至十月十五日	九、三四二	一四、三七五	二、二六一	三、二四七
	一一、三三六		三、四二六	
	三、五九四			

即ち第一六表 第一七表を比較するに換算重量にも占用値にも大きい差の存する事が知られる。

即ち之に依つて阪神國道でも場所により交通量に相當繁疎の相違ある事を知る。實際阪神國道も西宮市以西は自動車にて時速四〇糠、或は五〇糠以上を以て疾驅する事容易なれども、大阪市内より尼崎市に至る間は自動車互に肩摩して長蛇の列を爲し、時速三〇糠以上にては到底走行し得ざる場合も屢々經驗する處である。

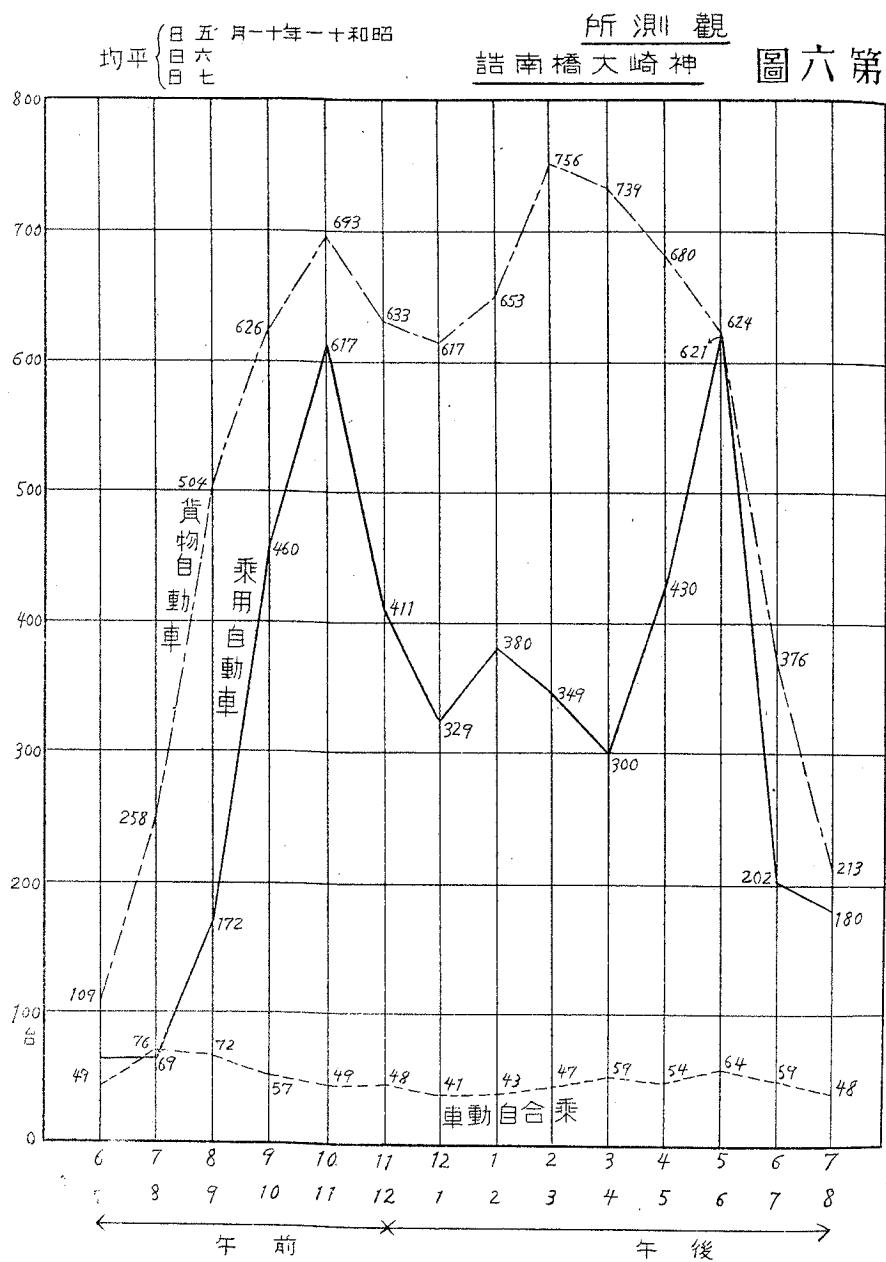
線にて總占用値二五、〇〇〇)を以て飽和に達したものと認定せられてゐる。然るに阪神國道に於ける神崎大橋南詰の記録第二六表を見れば、昭和八年の一日一車線當り占用値は五、二二九、昭和十一年に至つては實に八、四二〇を數へ、京濱國道の五、〇〇〇と云ふ數値の二倍近い値を示し又昭和十三年に於ても尙六、三六六と云ふ大きな値を示して居る。

第二八表 神崎大橋南詰時間別通過車輛實數表（昭和十一年十一月五、六、七日三日間一日平均）

種別		時間		前	
步行者		午後		六七	
牛馬		一		八九	
自轉車		二		一〇一一	
荷車		三		一二一〇	
盈		四		一二一〇	
牛馬車		五		一二一〇	
自轉車動		六		一二一〇	
大型		七		一二一〇	
小型		八		一二一〇	
乘用		九		一二一〇	
合		一〇		一二一〇	
貨		一一		一二一〇	
大型		一二		一二一〇	
小		一三		一二一〇	
物		一四		一二一〇	
電車		一五		一二一〇	
計		一六		一二一〇	

(各列の右は換算重量、左は占用値)

通 車 駆 實 數 表



即ち第二九表の占用値を見るに、午前一〇時乃至一一時の間に於て、三、二二三一（歩行者を除く）と云ふ數値を示し、之を一車線當りに引直せば八〇八となるのであつて、之を京濱國道の最大一時間一車線當り占用値四〇〇（五車線で二〇〇〇）に比すれば、實に二倍と云ふ著しい對比を示すのである。

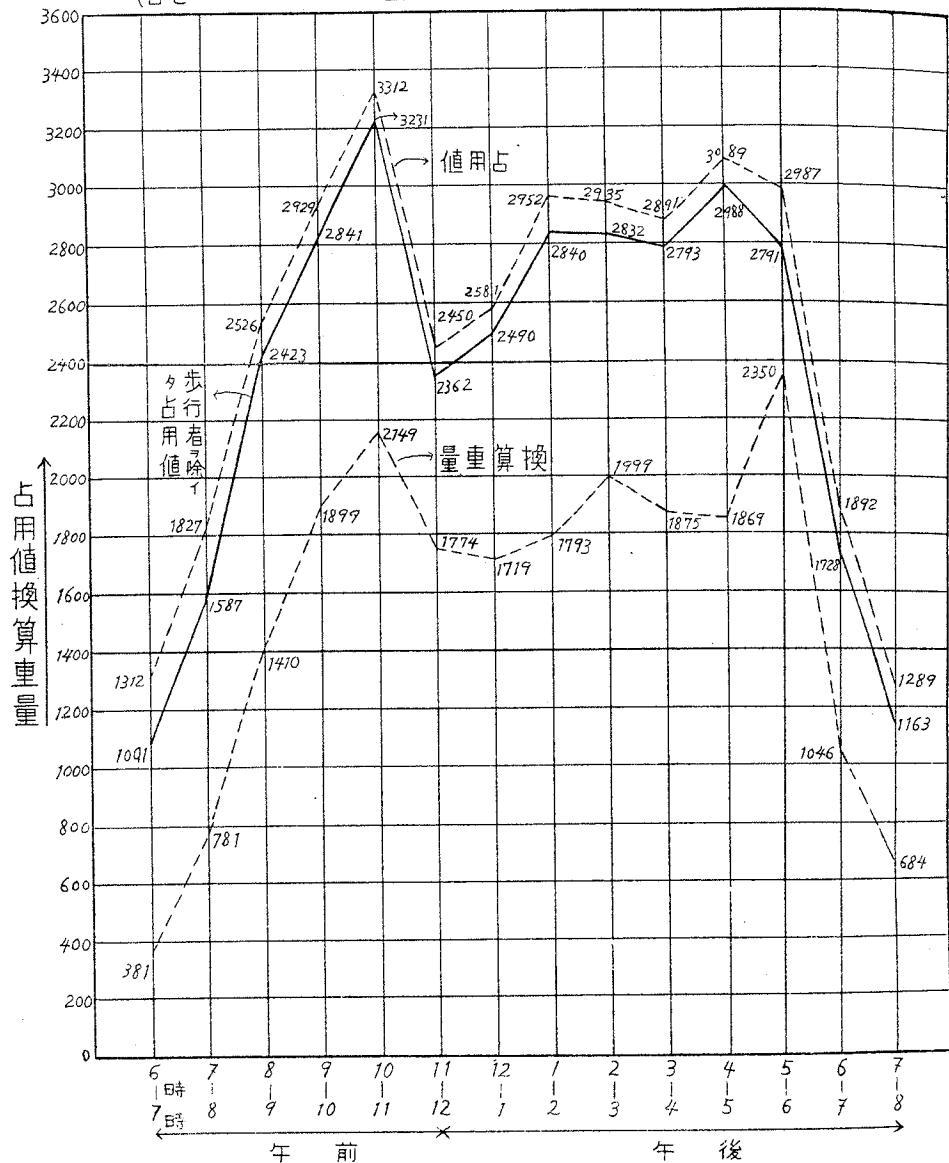
かかる事實を考慮する時は神崎大橋南詰觀測地点、更に之を押進めて尼崎以東に於ては、新國道は今日已に飽和以上の交通量に達したものと推定せらるゝのである。

占 値 換 算 重 量 表

所 觀 測

圖 七 第

均平 { 日五 日一十年一十和昭
日六 詣南 橋大崎神町佃区川淀西市阪大
日七



第三章 阪神國道の運輸効果

第一節 ガソリン消費量より見たる効果

第一章に於て詳述した如く、新舊兩國道孰れもアスファルト系鋪裝を爲し路面としては稍々良好と認め得れども、其線形に至つては舊國道は舊態依然屈曲著しく、幅員又狹小にして、しかも人馬車の通行極めて多く自動車の徐行を餘儀なくせらるゝ箇所が極めて多い。即ち武庫郡本庄村青木地内、西宮市内、尼ヶ崎市内、大阪市西淀川區大和田町、姫島町地内の如きはその著しき例である。よつて舊國道に據る大阪—神戸間交通は長時間を要するのみならず新國道に比し相當多量のガソリンを消費するものと考へられる。

今新舊兩國道に依るガソリン消費量比較試験を行つた結果を述ぶれば次の如し。

比較を行つた區間は大阪市西淀川區海老江中二丁目新舊兩國道交叉点、神戸市灘區岩屋新舊兩國道交叉点間であつてこの間新國道は延長二四・八八糎、舊國道は二五・五五糎である。試験の方法は自動車の「ガソリンタンク」より「ガソリンポンプ」、「キャブレーター」に至る「バイブ」を中心断し、その一端を別に適量の「ガソリン」を正確に計量して收めた石油罐内に聯絡する。石油罐は

之を密閉し、試験區間走破の後直ちにガソリンの残りを計量してその差を消費量とした。

試験車輛性能概略次の如し。

第三〇表

車輛の種類		ナツシユ（一九三六年型）乗用車大阪第七八三號	
車輛の重量		一、八四〇匁 定員七名	
車輛の寸法		長五・一五米 幅一・八五米 高さ一・八〇米	
機関概略		氣笛數八 氣笛總容積四・三二五立方公分 馬力（警視廳）三一	
試験開始迄の走行距離		四一、二七八秆（最初の試験に於けるもの）	

第三一表 新國道ガソリン消費量試験

番號	區間	延長	試験時間	ガソリン走行秆數當	摘要	要
一	自神戸市灘區岩屋至大阪市西淀川區二丁目	二四・八八秆	昭和十五年一月二十日	四・六〇立	路面良好、路面乾燥 気温六・四度	
二	自海老市中二丁目至神戸市灘區岩屋	二四・八八秆	昭和十五年二月七日	四・三九	路面良好、路面乾燥 気温九・〇度	

右の試験に於て平均速度を求めた結果を擧ぐれば、

第三二表 (新國道)

番號	所要時間	延長	距離	試験時間	距離	時間	速
一	八八分	二五・五五	二五・五五	二四・八八秆	三九・三〇秆	三九・三〇	
二	七八分三二秒	二五・五五秆	一九・五五	二五・五五秆	一七・四二時	一七・四二時	

第三三表 舊國道ガソリン消費量試験

番號	區間	延長	試験時間	ガソリン走行秆數當	摘要	要
一	自神戸市灘區岩屋至大坂市西淀川區二丁目	二五・五五秆	昭和十五年一月二十日	六・四〇立	路面良好、路面乾燥 気温六・二度	
二	自海老市中二丁目至神戸市灘區岩屋	二五・五五秆	昭和十五年二月二十四日	一五・一二秆	路面良好、路面乾燥 気温六・二度	

第三四表 (舊國道)

番號	所要時間	距離	時間	速
一	八八分	二五・五五秆	一九・五五	
二	七八分三二秒	二五・五五秆	一九・五五	

依つて今新國道、舊國道各々二回の試験によるガソリン消費量の平均を夫々四・五〇立、六・二七立と採れば、

$$y = 6.27 / 4.50 = 1.39$$

即ち試験區間の新舊國道のガソリン消費量比率を求むれば、舊國道は新國道に比し一・三九倍、約四割余分に「ガソリン」を消費する事が判る。試験區間に於て舊國道は新國道より僅か六七〇米長きに過ぎず、且新舊國道とも略同程度の鋪装面を有するにも拘らず、ガソリン消費にかかる大きな差を生じたのは畢竟舊國道の線形幅員の不合理なると共に、交通混雑にも起因するものであつて舊國道が新國道に比し如何に自動車交通上不經濟なるか此一事によるも明白に察知し得らるゝ所である。

参考までに使用ガソリンの性質を略記すれば第三十五表の如し。

第三十五表

比 重	分			溫 度	備 考
	七〇度迄	一〇〇度迄	一五〇度迄		
○・七四三 ボーメ度 五七・六	九 %	三五 %	七九 %	一九八度 C に比重は一五〇 に於けるもの	

第二節 特殊利用効果

新國道の特殊の効果として、阪神國道電車、阪神國道バスに就て述べる。

阪神國道電車は、國道改築當時阪神電氣鐵道會社の出願により特許せられたものであつて、軌道併置によつて、國道幅員の計畫も一二間より一五間に改められたのである。運轉區間は大阪市此花區茶園町より神戸市灘區岩屋間約二六・〇〇杆である。

國道に軌道併置の可否論は暫く置き、この國道電車もその沿線が住宅、工場を以て満され、全く市街化するに随つて、相當運輸効果を示したものと云ふ事が出来る。

現在大阪市から神戸市に至る間、省線、阪神電車、阪急電車等の完備した併行線があるが爲に、國道電車は國道上に敷設せられたので無ければ、その存在價値は極めて乏しいのである。今阪神國道電車の營業成績を、昭和三年と、昭和十二年とに就て比較して見るに、

第三十六表

種別	昭和三年		備考
	乗客數	收入	
收運轉回數	六、一二一、八七九人 六一七、八六九・八九圓 二六九回 一〇〇分	一三、二三一、七二六人 八六三、三九八・二八圓 四一五回 六七分	收入が乗客数の増加に比例しないものと云ふれば、運賃を一區五錢に低下したるに依る
全區間運轉時間	六一六、一三一、七二六人 八六三、三九八・二八圓 四一五回 六七分	一三、二三一、七二六人 八六三、三九八・二八圓 四一五回 六七分	乗客数の増加に比例しないものと云ふれば、運賃を一區五錢に低下したるに依る

この表を見るに、昭和十二年は昭和三年に比し、乗客數七、一〇九、八四七人増加し、實に一一六%の増加率となり、又收入の増加は約二四五、五二八圓（運賃を半減したる結果乗客數の増加に比例せず）で、その増加率は約四〇%を示して居る。これ實に新國道改築により、急激なる沿道發展の結果を物語るものと云つて良いのである。又阪神國道バスに就て述ぶれば、同社線は大阪市北區梅田新道—神戸市神戸區三宮間 六三・四杆を運轉するものにして、今同社線の昭和四年と昭和十二年に於ける營業成績を比較すれば

第三七表

種別	昭和四年		摘要
	乗客數	收入	
收運轉回數	二、三一三、六四五人 二五四、五〇〇・九一圓 一五七回	七、〇三四、九七四人 七四〇、一〇九・二一圓 一五七回	
運賃時間	一區 八錢 八〇分	一區 六錢 八七分	

昭和十二年は昭和四年に比し、乗客數は四、七二一、三二九人の増加を示し、増加率は實に約二〇四%となる。又收入に就ては、四八五、六〇九圓の增收で、運賃一區二錢の値下にも拘らず、增收比率は約一九一%の多きに上つて居る。阪神國道バスこそ、全く新國道に依存して利益を擧げつゝあるものであつて、如何に國道の恩恵の著しいかゞ窺はれるのである。

第三節 昭和十三年に於ける阪神地方大水害と阪神國道

昭和十三年七月五日阪神地方を襲つた大水害は實に前古未會有の慘害を與へ、その損害は二億圓の巨額にのぼつて居る。單に神戸市内のみに就て見るも、その損害額は總計一四、四〇〇萬圓と稱

せられ、曾つて昭和九年九月關西一帶を襲つた大風水害の被害額二、二〇〇萬圓に比すれば、正に六倍と云ふ猛烈さであつた。この大水害に依つて、我國第一の生産都市大阪市と、東洋の終端港たる神戸市とを結ぶ交通、通信の大動脈が余す所なく切斷せられたのである。

阪神國道も勿論水害を被り、各所に於て交通杜絶の厄に會つたのであるが、鐵道、軌道等に比しその復舊極めて早く、阪神各都市の復興に多大の便益を與へたのである。以下各交通機關の被害と復舊狀況を述べ、阪神國道の與へた利便に言及す。

先づ東海道本線は芦屋川、住吉川、都賀川の決壊氾濫によるもの、即ち芦屋驛及び其附近、芦屋—攝津本山間、攝津本山—住吉間、六甲道—東灘間の被害最も甚大であつて、灘以東では武庫川鐵橋破損し、芦屋驛構内は土砂に埋没され、攝津本山—住吉間線路流失あり、住吉驛構内は特に土砂の堆積著しく、その量六萬立方米に及んだ。七月五日午前九時より大阪—神戸間電車、列車とも全く不通となつた。これが復舊は十二日四線中二線復舊し、大阪—明石間電車運轉と東京一下關間直通列車運轉を一部開始したるも、武庫川下り線鐵橋應急修理困難を極め、二十一日之が修理完了と共に、全線略平常に復する事が出來た。損害は約二二四萬圓と見積られた。

次に阪神電車の被害に就ては、同社本線が神戸市内に於て殆んど地下線なるが爲に、被害は甚大

であつた。神戸市内西灘—御影間は大石川の氾濫により西灘—岩屋間一・九糺浸水を蒙り、午前九時二十分運轉を休止し、午前十時三十分生田川の氾濫により地下線に浸水し、西灘—元町間も不通り、のみならず西宮—魚崎間又住吉川の氾濫により運轉休止やむなきに至り、全線にわたり休止箇所を生じた。これが復舊は西灘以西の地下線を濁水と土砂とを以て充塞せられ極めて困難であつた。梅田—西灘間は十一日に復舊し、困難なりし西灘—三宮間は二十二日、三宮—元町間は八月十六日に至つて復舊完了した。又國道電車も大石川、石屋川、住吉川、芦屋川の氾濫により、國道諸所に浸水し土砂堆積の爲、神戸—上甲子園間は七月五日午前九時五十分に至つて運轉を休止した。尙之が復舊は山打出—東神戸間に於て、特に國道都賀川橋の甚大なる被害の爲九月十一日迄復舊遲延した。之等損害額は約三四萬圓であつた。

阪急電車線は各社線中最も山手を通過せる關係上特に被害は大きかつた。石屋川附近の土砂崩壊し線路埋沒する事二五〇米に及び、又都賀川橋梁前後線路築堤延長各々三五米流失した。又特に岡本—御影間に於て、住吉川鐵橋附近は最も悲惨であつて、この鐵橋に依り堰き止められた山津浪は住吉村、本山村、魚崎町方面に最も大なる被害を與へた。之が復舊は七月二十一日住吉川單線運轉により全通したるも、八月一日の再度の出水に諸所不通箇所を生じたが、特に住吉川橋梁の復舊

意の如くならず九月二十三日水害發生以來八十一日振りに單線運轉、十一月一日漸く複線にて開通し全線復舊完了した。損害額は約六一萬圓と見積られた。

しかば阪神國道は如何と云ふに、河川の出水によつて沿線各所に相當の被害を齎したが、特に住吉川、都賀川、兩國道橋及び神戸市を中心地省線三宮驛附近が被害最も著しかつた。住吉川は阪急鐵橋によつて堰止められた土砂、住吉村、本山村下流方面に流出すると同時に、又住吉川國道橋によつて堰止められた土砂、大小無數の轉石は國道上に堆積して之が復舊に一大困難を感じしめた。しかし阪神國道復舊の爲には住吉橋前後整理は緊急を要するものとなりしを以て、兵庫縣は特に全橋整理隊を組織し、七月六日より大岩石、流木の整理、土砂の取除に努力し全月九日安全交通の程度に整理を完了した。都賀川の氾濫は國道上に於て約五〇〇米の幅を有し、國道橋面上一米余の土砂堆積し、川及び國道橋の存在不明となる程であつたが、高櫻工兵隊の來援を得て七日假橋を架設し、又上流に一橋を架け十日午前、往復の人車を分離する事が出來た。

今國道沿線杜絶期間を表を以て示せば

第三八表

番號	區間	交通杜絶期間	自動車通行開始	備考
一	尼ヶ崎市内	自七月七日至七月五日	七月一日	
二	西宮市—精道村	自七月五日至七月二日	七月七日	
三	本山村—御影町	自七月二日至七月二日	七月九日	
四	御影町—西灘	自七月二日至七月四日	八月四日	
五	西灘—脇濱	自七月四日至七月二日	八月四日	よる八月一日再度の出水に
六	無シ	至七月八月三日自八月二日	八月四日	

即ち右に略述した如く、國道の復舊に鐵道、軌道等に比し、その復舊は極めて迅速に行はれた事が判る。これは國道の被害比較的輕易なりしと共に、國道の性質上多少の土砂堆積は交通に何ら支障を與へざるによるものと考へらる。

又大阪—神戸間國道上を運轉する阪神國道バスの水害當時に於ける聯絡復舊狀況を表を以て示せば次の如し。

第三九表

月 日	區 間	聯 絡 種 類	備 考
自 七月六日 至 七月八日 七月九日(正午)	大阪—芦屋間 芦屋—田中間 田中—住吉宮西間 住吉宮西—(大石川東) 大石川西—三宮間 大阪—三宮間	折返 徒步聯絡 折返運轉 大石川徒步聯絡 直通運轉	住吉川橋梁破損のため 大石川橋破損のため下 流の迂廻による

かくの如く國道の迅速なる復舊と共に、國道運轉のバスも速に平常運轉に復したのであつた。今

阪神國道バス會社の營業成績を昭和十二年七月と昭和十三年七月に於て比較して見るに、

昭和十二年七月（水害の前年）に於ては、

乗客人員 五六五、六五七人

收入 五八、八七一・二〇圓

なるに對し、

昭和十三年七月（水害當時）に於ては、

乗客人員 九三八、九九〇人

收入 九七、六〇五・八七圓

であつて、

昭和十三年七月は昭和十二年七月に比し、人員に於て約一・六六倍、收入に於ても全じく約一・六六倍の增收を示し、全バス會社としても昭和十三年七月は全社創始以來の好成績なりしと云ふ。即ちすべての交通機關杜絶の中にあつて、阪神國道バスのみが如何に有効に利用せられたるかを知る事が出来るのである。又同様の事實を参考までに述べると、當時神戸市内は市營電車始めバス等交通機關全滅の姿であつて、僅かに高架の省線電車の折返運轉によつてのみ乗客を運ぶ狀態であつた。今昭和十二年七月と昭和十三年七月に於ける乗降客人員を比較すれば、

三宮驛に於て、

第四〇表

日	附	乘	客	降	客	日	附	乘	客	降	客
昭和十三年七月五日 ク六日		七、二四八人		四、八二六人		昭和十二年七月五日 ク六日		九、六六七人		一〇、〇三三人	
		二〇、一二三		一五、八五六				九、二九〇		九、六六九	

ク 七日	二三、二七六	二〇、六七四	ク 七日	八、八〇六	八、九二六
ク 八日	二四、六二三	一八、一二四	ク 八日	七、三一一	六、七八四
ク 九日	二二、五五四	二〇、〇八四	ク 九日	七、二一一	六、九八六

即ち三宮驛乗降客は七月五日當日は流石少いが、七日、八日、九日、となるに隨つて昭和十三年は昭和十二年に比し約三倍の數字を示して居るのも興味深い。

次に通信機關に就いて見るに、交通大動脈たる東海道本線が二週間に亘つて不通なりし爲、郵便物の遞送上幾多の困難を生じた。加ふるに阪神國道一時杜絶の爲陸上の交通全く不通となつた爲、海運により辛ふじて應急措置を講じたが、船便は何分其の着發規定通り行はれざる場合多く、その爲締切時刻の豫定が困難であり、又碇泊時間も僅少なるが爲聯絡極めて困難であつた。随つて國道交通回復すると同時に、海上聯絡は國道聯絡に移り神戸中央郵便局の差立、到着關係いづれも八日又は九日より自動車を以て行はれる事となつた。

殊に忘るべからざるは各地方よりの救援の往來であつて公私團体の救援自動車、例へば近畿各都市の給水自動車、應急資材運搬トラックが多數洪水發生當日より數日を出でずして阪神國道を西に直行して、縱横の活躍を爲し、その後陸續として復舊資材を滿載して神戸に向ふトラックは幾萬と

も知れず、阪神國道は正に災害時の交通の花形であつたと申しても過言では無かつた。

第四章 阪神國道効果の經濟的觀察

第一節 運輸費節減による利益

阪神間に於て現在の新國道なかりせば、現在新國道を往來する自動車がすべて舊國道に移行するかと云ふに之は不可能事に屬する。之は舊國道の容量極めて小にして、到底新國道の交通量を收容し得ないからである。第二章に於て舊國道の許容自動車交通量を五〇〇台と推定したが、若し新國道なかりせば、今日新國道を利用して運送せられつゝある貨物は軒輸送に依る外なかつたであらう

今阪神間軒輸送の實際を知る爲昭和七年に於ける神戸港外國貿易の輸出入貨物搬入荷捌情況を見るに、

第四一表 神戸港輸出入貨物搬入荷捌表（昭和七年）

輸送種別		輸出貨物搬入		輸入貨物荷捌		
	噸	量	割合	噸	量	割合
神戸市内	九五〇、六六八	八〇%	一、六三七、九三七	五三%		
阪神間船輸送	五九、二五九	五	七一六、〇〇一	二三		
阪神間自動車輸送	三七、三九七	三	三〇、〇七四	一		
阪神間汽車輸送	六九、八〇〇	六	一一〇、一三九	三		
其 他	六三、七〇七	六	六〇四、七三八	二〇		
合 計	一、一八〇、八三一	一〇〇	三、〇九八、八九〇	一〇〇		

(神戸商工會議所調査)

右表によれば神戸港輸出貨物の五分、輸入貨物の二割三分が阪神間船輸送にて取扱はれた事になつて居る。又阪神間汽車輸送は神戸港輸出貨物の六分、輸入貨物の三分を占むる。

阪神間輸出入連絡貨物の減少の特に著しいのは鐵道であつて、阪神國道改良に伴ひ、鐵道運輸は自動車運輸に蚕食されつゝある現状である。之は自動車の發達、道路の完備に伴つて必然起る問題であるから、阪神國道に就ても比較研究するべく對照物は鐵道輸送では無くて船輸送でなければならぬ。

そもそも船輸送の特長は大量輸送と運賃の低廉に在る。しかも船輸送の長所は目的地に到達してより自動車等の小運搬を要せず、直接工場の岸壁に横付けする如き場合に發揮せらるゝのであつて阪神間船輸送に就て云へば更に小運搬を必要とする場合多く、従つて直接自動車輸送によるよりも運賃高價なる場合が多い様に考へられる。

自動車運賃は大阪市内神戸市内間二噸積にて一二圓乃至一五圓である。それ故一噸當り六圓乃至七・五〇圓となる。船運搬の場合は大阪港—神戸港間船運賃約二圓(雜貨)、船積、船揚料金各々噸當り約八〇錢乃至一圓、小運搬貨物自動車二噸積三・五〇圓乃至四圓(大阪は船場、神戸は元居留地方面標準)なる故、頗當り運賃總計約七圓乃至八圓となる。即ち船運搬が自動車運搬に比して頗當り最高價格にて五〇錢高く、平均で七五錢高い事を示す。よつて今新國道を貨物自動車によつて運搬する場合の貨物運賃と、新國道存在せざる場合の船運搬の運賃とを年額で比較して見度い。

直通貨物自動車數は第二章第五表、第七表、第九表により武庫郡中野に於ける上下計の平均を以て標準とす。かかる時は

$$n = (3,460 + 2,988 + 5,140) / 3 = 3,863 \text{ 台}$$

次に貨物自動車盈車、空車の割合を調査するに、

第四二一表 (神崎大橋南詰)

觀測年月	空車	貨物自動車	計	百分率車	百分率車
昭和三年十月	一一七三	四九八	七七一	六五%	三五%
昭和六年八月	七三七	一二六六	一一〇〇三	六三々	三七々
昭和八年六月	七三四	一、九五九	一、六八三	七三々	二七々
昭和十一年十一月	三、四一四	一、七九一	一、六一五	五八々	四二々
昭和十三年十月	一、五六四	三、一一一	四、六七五	六七々	三三々
昭和十四年五月	一一〇〇七	一、六五九	四、六六六	五七々	四三々
平 均	一一一六三	一、一六三	六四々	三六々	

第四三表 (左門橋北詰)

觀測年月	空車	貨物自動車	計	百分率車	百分率車
昭和五年三月	四五三	八一〇	一、一六三	六四%	三六%
昭和八年六月	一〇〇八五	一、八四五	一一九三〇	六三々	三七々
昭和十二年九月	一、九六八	三、一六二	五、一三〇	六二々	三八々
昭和十三年十月	一、七九四	一、五八六	四、三八〇	五九々	四一々
平 均	一一一六三	一、一六三	六二々	三八々	

第四四表 (本山村中野)

觀測年月	空車	貨物自動車	計	百分率車	百分率車
昭和五年三月	二九一	七三六	一〇一七	七二一%	二八%
昭和八年六月	八五六	一、四四五	一、三〇一	六三々	三七々
昭和十二年九月	一、一九五	一一六五	三、四六〇	六三々	三七々
昭和十三年十月	一、六七一	一一三九二	四、〇六四	五九々	四一々
平 均	一一一六三	一、一六三	六四々	三六々	

以上の諸表を見るに、貨物自動車の盈車の割合は孰れも六割附近である。今前記三表の平均を求

むれば、

$$y = (64 + 62 + 64) / 3 = 63\%$$

よつて標準台數三・八六三台の六三三%を盈車とすれば、

$$3863 \times 0.63 = 2434\text{台}$$

貨物自動車を二噸積とすれば一日四、八六八噸を運搬する事となる。しかるに舊國道も又一日五〇〇台の自動車は通過可能と推定したのであるから、舊國道の貨物運搬量を求めて見るに、第二章第一表に依つて一日通過自動車二七三台の内、貨物自動車は一八四台であるから、之を標準にとれば、 $(500 \times 184) / 273 = 337$ 台は貨物自動車であつて、其内盈車は $337 \times 0.63 = 212$ 台となる。

随つて舊國道も一日四一一四噸を運び得る計算となるのである。

それ故今新國道なるものとする、 $4,868 - 424 = 4,444$ 噸は船を以て運搬しなければならぬ。船運搬は國道運搬に比し、頗當り七五錢高價であるから、之を逆に考ふれば新國道は一年間に $0.75 \times 4,444 \times 365 = 1,216,545$ 圓即ち約一、一、一六、五〇〇圓の利益を生みつゝある勘定となる。

第二十一節 ガソリン消費節減による利益

次にガソリン消費量に就ては第三章第一節に明らかにした如く、試験區間に於て舊國道は新國道に比し一・三九倍のガソリンを要する事を知る。

今新國道試験區間のガソリン消費量標準を貨物自動車一・五〇ガロン、乗合自動車一・一〇ガロン、乗用自動車は一・〇〇ガロンと假定すれば、舊國道に於ては貨物自動車二・〇九ガロン、乗合自動車一・六七ガロン、乗用自動車は一・三九ガロンを要する事となる。今新國道を直通して居る自動車が全部舊國道を通過する事は前述の如く全く不可能であるが今假に出来るとして新國道のガソリン節約による利益を計上する。

貨物自動車數	前に述べた如く三、八六三台、同様にして乗合自動車數三三一七台、乗用自動車數
一、一四一一台、ガソリンの單價一ガロン六五錢と見れば、利益額は	
貨物自動車	$0.65 \times (2.09 - 1.50) \times 3,863 \times 365 = 540,733$ 圓
乗合自動車	$0.65 \times (1.67 - 1.20) \times 337 \times 365 = 37,578$ "
乗用自動車	$0.65 \times (1.39 - 1.00) \times 1,142 \times 365 = 105,666$ "
合 計	683,977圓

新舊兩國道とも同數の自動車が通過するとしてのガソリン節約の利益勘定は實に年約六八四、〇〇圓の多額に達す。

第三節 通過時間節減による利益

次に新舊國道を通過時間の方面より考察して見る。

即ち第三章第一節に於て述べた如く、新國道試験區間の通過時間は標準三八分である。舊國道は一回の試験にて七八分と八八分との結果を得て居るのであるから、今この平均を取れば八三分（一時間二三分）となる。それ故大略新國道で四〇分を要し、舊國道で一時間三〇分を要するを見て大過ないと思ふ。

此處で自動車の固定費（購入費利子、人件費、車庫費、税金、保険費）を考へて見るに、昭和九年鐵道省運輸局に於て、高崎—隅田間をドッヂ、プラザースニーテン積貨物自動車（購入費四、六〇〇圓）に就て調査せられたるものを見れば次の如し。

一、資本利子：年四分とすれば、年利子一八四圓なる故一日當り〇・五〇四圓

二、人件費：運轉手月給五〇圓、助手月給二〇圓とすれば、一日當り一・一・一・一・一・一圓

三、車庫費：地代、電燈、水道、雜費共月當り三五圓、車庫償却費は建造價格を一、五〇〇圓とし、耐久年限を八年とすれば、月當り一五・六二五圓なる故合計一日當り一・六八八圓

四、税金：税金年額二七・五五〇圓、組合費年額一〇圓とすれば税金、組合費月額は二・一・一九圓なる故一日當り〇・一〇四圓

よつて合計一日當り四・六二九圓、従つて一口一〇時間運轉とすれば、一車一時間當り貨物自動車固定費は〇・四六三圓を要する。

次に乗用車、乗合自動車に就ては乗用車は大略貨物自動車の五割と假定すれば〇・一一一・一圓、乗合自動車は貨物自動車と全じく〇・四六三圓を要する。この時間當り固定費を用ひて通過時間短縮の利益を算出すれば、節減時間は五〇分なる故、

貨物自動車	$0.463 \times 50 / 60 \times 3,863 \times 365 = 543,976$ 圓
乗用自動車	$0.232 \times 50 / 60 \times 1,142 \times 365 = 80,407$ "
乗合自動車	$0.463 \times 50 / 60 \times 337 \times 365 = 47,455$ "
合 計	671,838 圓

即ち之は新舊兩國道同數の車輛通過し得るものとしての利益額を算出したのであるが、舊國道は極く僅少の自動車交通許容量を有するに過ぎないから、事實は六七二、〇〇〇圓より更に大なる利益を確保し得る事は明瞭である。

第四節 地價騰貴による利益

阪神國道沿道の發達に伴つて地價の騰貴を生ずるは自然の理にして、今その騰貴状況を見るに、

第四五表

町村名	阪神國道買收、坪當り地價圓	昭和十四年		値上率 倍
		坪當り地價圓	平均坪當り地價圓	
小田村	一〇〇圆	一一〇〇	一一〇〇	一一・四
尼崎市	一五〇圆	一〇〇圆	一〇〇圆	一・二五
大庄町	六〇圆	八〇〇	八〇〇	一・二五
尾木村	八〇圆	七〇〇	七〇〇	一・二五
魚津町	八〇圆	七三〇	七三〇	一・二五
本宮村	一〇〇圆内外	一〇七〇	一〇七〇	一・二五
精道村	一五〇圆	二七七〇	二七七〇	一・二五
大宮村	一五〇圆	二九〇〇	二九〇〇	一・二五
西宮村	一三〇圆	三〇〇〇	三〇〇〇	一・二五
今津町	一三〇圆	一二〇〇	一二〇〇	一・二五
大庄町	一〇〇圆内外	一七〇〇	一七〇〇	一・二五
尼崎市	一〇〇圆内外	二三〇〇	二三〇〇	一・二五

住吉町	尼崎市	大庄町	尼崎市	尼崎市	尼崎市
平野町	七二〇〇	一一〇一	一〇〇一	一一五〇	一一五〇
御影村	六四〇〇	一一〇一	一〇〇一	一五〇	一一五〇
六甲村	二六〇〇	一一〇一	一〇〇一	一五〇	一一五〇
西灘村	二六〇〇	一一〇一	一〇〇一	一八〇	一一五〇
均町	二六・四〇	一一一	一五〇	一五〇	一五〇
			四・二	五・八	五・八
				四・八	四・八
				二・〇	二・〇
				一・七	一・七

(兵庫縣道路調査)

右の表に於て、昭和十四年に於ける沿道の地價は賣買實績乏しき爲、推定價格に過ぎないが大過なき價である。第四五表によれば、値上り率は尼崎市の一二・五倍を最高に、住吉町の一・七倍が最低である。之によつても如何に沿道地價騰貴の著しいかゝ窺ひ知り得らるゝのである。値上り率の最も甚しい尼崎附近は新國道改築當時最も市街地から遠ざかつて居たのと、尼崎市が工業都市として近年急激に發展したるに依るものと考へられる。

本年一月尼崎市職業紹介所を阪神國道沿ひ（尼崎市昭和通二丁目）に建設するに當り敷地一二二坪を買収したる處、買収單價は坪當り一一七圓であつたと云ふ實例がある。精道村、魚崎町、住吉町、御影町等が割合地價騰貴率小なるは國道改築當時より市街地であつた關係上、すでに相當地價高價なりしに依るものである。之を要するに、阪神國道築設に依り地價騰貴に及ぼした影響は極め

て甚大であると云つて良い。

この地價騰貴によつて年額幾何の利益を擧げつゝあるかを知り度い。文献に依れば（土木學會誌二二一卷十二號、道路の改良一九三三號）値上り計算地域を道路敷の一〇倍と見て居る。之には勿論疑問は存するが、かくの如き手段を探るのは地價騰貴の利益算出が極めて困難なるに依るものと考へられる。今この方法を探つて地價騰貴に依る利益を概算するに、阪神國道築造當時の平均買收費を坪二六圓、最近の地價を坪一〇〇圓とし、全延長一四、六八〇間（その内橋梁延長九五六間）幅員一五間とすれば、

$$(100 - 26) \times 10 \times 15 \times (14,680 - 956) = 152,33,400\text{圓}$$

即ち値上り總額は實に一五、〇〇〇萬圓以上にのぼるのである。

今土地所有者の投資利廻を年三分と見ても一年の利益は約四五七萬圓と云ふ莫大な數字となるのである。

第五節 總括

前節に於て各種の利益を經濟的に觀察したのであるが、しかば阪神國道築造以來、昭和十二年に至る一〇ヶ年間に總計幾何の利益を擧げ得たかを考へて見度い。

直通貨物自動車台數は本山村中野觀測所に於けるものを標準とすれば

第四六表

觀測年次	貨物自動車通過數	備考
昭和五年	1,0117	一日通過台數
昭和八年	11,1101	
昭和十二年	33,460	

即ち第四六表より貨物自動通過台數は年々もとに殆んど直線的に増加して居る。

今之を近似的に $y = 35.2x - 650$

$x = \text{昭和年次}$

$y = \text{貨物自動車通過數}$

なる式を以て示し、一〇ヶ年間に於ける一日當り平均通過數を求むれば一、九九〇台、その盈車數は本章第一節第四四表より一、一一六四台となる。

乗用自動車、乗合自動車は、

第四七表

觀測年次	乗用自動車	乗合自動車	備考
昭和五年	三〇一	三〇八	一日通過台數
昭和八年	一八二五	三七三	
昭和十一年	一六三三	三四八	

よつて之等の平均を取れば乗用自動車は 一・一・五・一・四、乗合自動車は二・四・一・四となる。今之等を一〇ヶ年間の平均を假定する。

(1) 前節に於て述べた軽運搬の比較による利益額を一〇ヶ年間總計すれば、
 $0.75 \times (1,264 - 212) \times 2 \times 365 \times 10 = 5,759,700$ 圓

(11) ガソリン消費節減による利益額を一〇ヶ年間總計すれば、今此一〇年間に於けるガソリンの平均單價をガロン當り五〇錢と見て、

貨物自動車 $0.50 \times (2.09 - 1.50) \times 1,990 \times 365 \times 10 = 2,142,733$ 圓

乗合自動車 $0.50 \times (1.67 - 1.20) \times 343 \times 365 \times 10 = 294,209$ "

乗用自動車 $0.50 \times (1.39 - 1.00) \times 1,253 \times 365 \times 10 = 891,823$ "

合計
3,328,765 圓

(11) 時間節減による利益額を貨物自動車、乗合自動車一車一時間當り固定費五〇錢、乗用自動車一十五錢と假定し一〇ヶ年間總計すれば、

貨物自動車 $0.50 \times 50 / 60 \times 1,990 \times 365 \times 10 = 3,026,392$ 圓

乗合自動車 $0.50 \times 50 / 60 \times 343 \times 365 \times 10 = 521,634$ "

乗用自動車 $0.25 \times 50 / 60 \times 1,253 \times 365 \times 10 = 952,781$ "

合計
4,500,807 圓

(國) 地價騰貴による利益額を求むるに、築造當時の地價を平均坪當り一十六圓、昭和十一年に於て平均一〇〇圓と假定し、土地所有者の投資利廻を年11分とすると、

$(100 - 26) / 2 \times 10 \times 15 \times (14,680 - 956) \times 10 \times 0.03 = 20,997,720$ 圓

合(1)、(11)、(11)の利益額を合計すれば、

(1) 5,759,700 圓

(2) 3,328,765 "

(3)..... 4,500,807 "

(4)..... 20,997,720 "

總計 34,586,992圓

即ち築造以來昭和十二年に至る一〇ヶ年に於て、新國道の與へたる利益額は少くも三、四五九萬圓以上に達するのであつて、之を新國道築造に要した總工費一九三七萬余圓と比較する時新國道の効果は既にその築造費を償つて余りあるのみならず、尙將來享くる利益は想像に餘りあるものである。

第五章 阪神地方經濟情勢

第一節 一般地方情勢

阪神國道沿道市町村は現在大阪市、神戸市、尼崎市、西ノ宮市、御影町、大庄村、鳴尾村、瓦木村、精道村、本山村、住吉村の四市一町六村であつて、之等市町村に就き、人口増加及び歳出の二方面より地方

情勢伸長の模様を述べる。

(一) 人口の増加

一地方の急激なる産業開發に依る反應は人口増加によつて明確に表現せられる。勿論之は人口自然増加のみならず、工場建設等により多數の職工、人夫の移住によるものである。

今之等市町村の昭和三年、昭和十二年現在の人口を調査し、一〇ヶ年間に於ける人口増加の状況を窺はんとする。

第四八表

市町村名	人口		備考
	昭和三年	昭和十二年	
大阪市	二,三三三,八〇〇人	三,二一三,〇〇〇人	
神戸市	七一七,七七一	九六四,〇〇〇	
尼崎市	四九,三〇八	一四〇,二〇〇	
西宮市	三九,五六一	九七,三〇〇	
西ノ宮市	一五,五〇四	一	昭和八年西宮市へ合併
御影町	一七,一三〇	二一,二〇〇	
今津町	八,八一〇	一	昭和四年神戸市へ合併

昭和十一年尼崎市へ合併

合計	三、三五二、六二〇	四、五六二、〇〇〇	
西灘	一〇、七五〇	一	昭和八年西宮市へ合併
六甲	一一、九三〇	一	昭和四年神戸市へ合併
住吉	二一、三五〇	一	
本庄	二二、五一三	三六、五一三	
精道	二二、九四九	七、八四九	
瓦山	二二、九三七	九、三二七	
大木	二二、九三一	四、六五二	
精尾	二二、四九一	七、三六四	
大社	二二、四六〇	一四、一八二	
精尾	二二、五二〇	一八、五六〇	
大庄	二二、二〇〇	一五、二〇〇	
精尾	二二、七五〇	一〇、七五〇	
精尾	二二、三五〇	一一、九三〇	
精尾	二二、九三〇	二一、三五〇	
精尾	二二、九三〇	二二、五一三	

即ち昭和三年人口總計三、三五二、六二〇人であつたものが、昭和十二年には四、五六二、〇〇〇人に増加して居る。そしてこの一〇年間の増加人數は一、二〇九、三八〇人である故、平均一年間の増加數は一二〇、九三八人であつて、人口一〇〇〇人當りの増加數は三六・〇七人を示す。又各都市に就き個々に比率を求むれば大阪市は昭和三年人口一、三三三、八〇〇人なりしものが昭和十二年三、二一三、〇〇〇人に増加して居るのであるから、一年平均人口一、〇〇〇人に就き三七・六七人の増

加となり、神戸市は昭和三年七八三、八三一人（昭和四年合併の西郷町、六甲村、西灘村の人口を加算す）、昭和十二年九六四、〇〇〇人にして、一年平均人口一、〇〇〇人に就き二二・九九人の増加を示し、尼崎市は昭和三年八五、八二一人（昭和十一年合併の小田村人口を加算す）、昭和十二年一四〇、二〇〇人にして、一年平均人口一、〇〇〇人に就き六三・三六人と云ふ著しい増加となり、西宮市に就ては昭和三年六四、三九六人（昭和八年合併の今津町、大社村の人口を加算す）、昭和十二年九七、三〇〇人にして、一年平均人口に就き五一・一〇人の大きな増加を示す。

今内地の人口自然増加情況を見るに、

第四九表 内地人口自然増加表

年 次	實數人（單位一〇〇〇人）			人口（一〇〇〇人に就き）		
	出生	死	亡	自然增加	出生	死
昭和三年	二、〇七七	一、二一六	八六二	三四・三〇	二〇・一〇	一四・二〇
昭和四年	二、〇七七	一、二一六	八一五	三三・〇〇	二〇・〇四	一二・九六
昭和五年	二、〇八五	一、二一六	八一四	三二・三五	一八・一七	一四・一九
昭和六年	二、一〇二	一、二一七〇	九六一	三二・一七	一八・九八	一三・一九
昭和七年	二、一八三	一、二四〇	八六一	三二・九二	一七・七三	一五・二〇
昭和八年	二、一三一	一、一七五	九二七	三一・五五	一七・七六	一三・七九
昭和九年	一、一九三					

昭和九年	二一〇四三	一、一三四	八〇九	二九・九七	一八・一	一一・八六
昭和十年	二一九〇	一、一六一	一〇二八	三一・六三	一六・七八	一四・八五
昭和十一年	二一〇一	一、一三〇	八七一	二九・九二	一七・五一	一二・四一
昭和十二年	二一八〇	一、一〇七	九七二	三〇・六一	一六・九五	一三・六五

人口一、〇〇〇人に就ての増加數を一〇ヶ年平均すれば一三一・六三一人となる。即ち大阪市、神戸市尼崎市、西宮市の人口増加の割合は内地人口自然増加に比し、孰れも非常に大きい事を知るのである。之は自然増加のみならず、移住の數の特に大きい事に原因するものと考へられる。

今試みに工場、職工の増加を調査するに、

第五〇表 阪神各都市の工場、職工數調

都 市 名	昭 和 三 年		昭 和 十 二 年	
	工 場 敷	職 工 敷	工 場 敷	職 工 敷
大 阪 市	五、二六二	一五九、五七四	一四、八四一	二九一、三六〇
神 戸 市	四三〇	五一、五五五	一、三三七	八五、二九七
西 宮 市	一一八	四、〇九六	二五一	六、五四九
尼 崎 市	八八	八、二一四	三一〇	二四、二七八

即ち大阪市は一〇年間に職工數 一三一、七八六人の増加で、大阪市總人口の増加に對する比率を求むれば、

$$Y_0 = 131,786 / (3,213,000 - 2,383,837) = 0.15$$

で約一五%を示し、又神戸市の職工の増加數は三三一、七四二人で、神戸市總人口増加數に對する比率は、

$$Y_{1k} = 33,742 / (964,000 - 783,837) = 0.19$$

で約一九%を示し、又西宮市は、

$$Y_n = 2,453 / (97,300 - 64,369) = 0.07$$

で約七%となり、尼崎市に就ては、

$$Y_a = 16,064 / (140,200 - 85,821) = 0.30$$

で約三〇%を示すのである。即ち職工の増加率は尼崎市の實に三〇%を最大として、大阪市、神戸がほゞ一五%及び二〇%、西宮市は最小とは云へ七%を示して居る。勿論各都市とも市外より通勤する職工數は相當あるものと想像されるが、上記の比率より見て、その家族の増加等をも考慮する時各都市の人口増加が工業の發展に負ふ所如何に大きいか窺ひ知られる。

今最も人口増加率の大きい尼崎市に就き、職業別戸数を昭和三年と昭和十二年とで比較すれば、

第五一表 職業別戸数比較(尼崎市)

(太字ハ減少ヲ示ス)

種 别	昭和三年 戸数		昭和十二年 戸数	增加 戸数
	農 水 産	工 鎌 鑛		
合 計	二七七	九四	五一五	二八三
家事使用人	一〇、一二七	六〇二	三六	三六
其他有業者	七五七	七一	一六、四三九	一二、四一〇
公務自由業	七五四	一、五〇二	六、一二四〇	二、九四三
交 通 業	八六	二、八二六	一、五〇二	七九一
業 業	二九一五	二九一五	二〇六九	二六四一
業 業	二七〇	一、一七二	一八四	五七〇
業 業	一一七二	三一、九四五	二一、八一八	

即ち上表によるも、工業を職とするものの戸数増加は断然群を抜き尼崎市總戸数の増加二一、八一八戸の内工業を職とするものの戸数増加は、一二、四一〇戸なる故、その増加率は五七%を示し政は膨脹するのである。

今沿道市町村の歳出を昭和二年、昭和十一年に就て比較すれば次の通りである。

(一) 市町村歳出の膨脹

阪神國道沿道の各市町村は阪神地方工業の目覺ましい躍進に伴ひ、人口の著しい増加を招來し、随つて土木費、教育費、衛生費、社會事業費、或は都市計畫費等あらゆる方面にわたつて市町村財政は膨脹するのである。

第五二表 市町村歳出比較表

市町村名	昭和二年度		備 考
	昭和十一年度	備 考	
大 鳴 尼 西 神 戸 阪 市	三一七、一五二、〇〇〇圓	四八四、九三三、五九五圓	
大 瓦 庄 尾 崎 宮 市	四九、八六三、七四〇	九三、七一八、二四二	
大 木 村 村 村 市	七七〇、八一七	二、七八八、四九一	
大 木 村 村 村 市	一、七二七、九八五	四、一四五、三〇九	
大 木 村 村 村 市	七一、〇二〇	四三一、三六七	
大 木 村 村 村 市	七五、九一六	三八九、六六五	
大 木 村 村 村 市	二八、三九五	一三七、三九六	

	精道	本住	西御	小山	吉影	田郷	村町	村村	村村
計	二六九、六九六々	七一〇、六九九々							
四〇三、八八一々	二二七、六九九々								
一一六、七七四々	五四六、三七三々								
二五八、三〇七々	三四〇、八六一々								
一六三、二〇八々	四二四、七一四々								
八三、四〇二々	三七一、六六九、八五七々								
五八八、三七九、六九七々	五八八、三七九、六九七々								
	昭和十一年尼崎市に併合								
	昭和四年神戸市に併合								
	一々								

即ち昭和二年に於ける阪神地方市町村歳出總額は約三七一、六七〇、〇〇〇圓にして、昭和十一年には五八八、三八〇、〇〇〇圓に膨脹して居るから、昭和十一年は昭和二年に比し一・五八倍の大きな比率を示してゐる。又昭和十一年度全國市町村歳出總額(決算)は一、九七四、二五五、八六三圓(市歳出一、四〇三、六一八、二三八圓、町村歳出 五七〇、六三七、五七五圓、大藏省大臣官房財政經濟調査會調)なる故今阪神地方市町村歳出總額を之と比較するに約三〇%を占むる事を知る。全國市町村總數一、五四六(昭和十一年末)にして、阪神國道沿線の市町村數は一一である。もつて如何に阪神地方市町村が活氣に溢れ躍進の途上にあるかを知る事が出来る。

第二節 阪神地方産業の展望

(一) 工業の發展

阪神地方の發展に於て工業部門の躍進は特に著しい。今大阪市、神戸市、尼ヶ崎市、西宮市等沿道四都市の昭和三年と昭和十二年に於ける工場數、職工數、生産額を比較すれば第五三表、第五四表、第五五表、第五六表の通りである。

(表中太字は減少を示す。)

第五三表 工場數職工數及生産額比較表

(大阪市)(使用職工五人以上工場)

事業別	昭和三年		昭和十二年		増減	生産額ノ倍率
	工場數	職工數	工場數	職工數		
紡織工業	七四	四四、〇五五	二二七、六九三	九〇〇〇〇	一〇〇	
金屬工業	一〇〇	一八〇	一九、七九	九〇〇〇〇	一〇〇	
機械器具工業	二六六	二六六	三一八、一七	一〇〇〇〇	一〇〇	
化學工業	一四二	一七一	三三、六三	一〇〇〇〇	一〇〇	
製材及木製品工業	三三	一四三	一六三、〇五	一〇〇〇〇	一〇〇	
印刷及製本業	三二	八、三〇	二四、六〇	一〇〇〇〇	一〇〇	
食料品工業	五、五五五	五、五五五	一九、八二	一〇〇〇〇	一〇〇	
						一倍
						生産額
						增加率

七〇

瓦斯及電氣業 其他ノ工業 計	九 八四 五、三六二 一五九、五七四	九五 一、一〇五〇 九〇、九〇〇 一、一四六、〇一四六三	一一 一、一〇五〇 一、一〇五〇 一、一四六、〇一四六三	？ 一、一〇三〇 一、一〇三〇 一、一四六、〇一四六三	三 一、一五五 一、一五五 一、一八六、九八、九三
----------------------	-----------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------

第五四表 工場數職工數及生產額比較表 (神戸市)

種別	昭和三年		昭和十二年		増 減
	工場數	職工數	工場數	職工數	
紡織工業	八 四、〇六	一八、八五、九四七	六八 八、八六	三三、五八九、八六六	？
金屬工業	三 三、七六	二九、四九一、九九	一五七 一、一六四	二一、六〇五	一、一〇三〇
機械器具工業	三五 三、七六	七五、〇七一、四九六	一五九 一、一六四	二二、三九、九〇〇	一、一〇三〇
化學工業	一六 一、一六四	八一〇、〇九八	一五九 一、一六四	一八、一〇、五三三	一、一〇三〇
製本及木製品工業	一〇 一、一〇	KO、SMP、KIK	一五九 一、一六四	一九、一〇、七一五	一、一〇三〇
印刷及製本業	三〇 一、一〇	一、一〇、九五〇	一五九 一、一六四	一、一〇、五三三	一、一〇三〇
瓦斯及電氣業	三〇 一、一〇	一、一〇、九五〇	一五九 一、一六四	一、一〇、五三三	一、一〇三〇
其他ノ工業	一七 一、一七	一、一〇、九五〇	一五九 一、一六四	一、一〇、五三三	一、一〇三〇
計	一七 一、一七	一、一〇、九五〇	一五九 一、一六四	一、一〇、五三三	一、一〇三〇

第五五表 (一) 工場數職工數及生產額比較表 (尼崎市)

種別	昭和三年		昭和十二年		增 減
	工場數	生産額	工場數	生産額	
紡織工業	二 二、一八	八、三八、八五	九 九、六三、一五	三〇、六三、九一	一、一〇三〇
金屬工業	一七 一、一七	一九、四九、七〇	五一 五、一九、三九	八一、八三、四八	一、一〇三〇
機械器具工業	一〇 一、一〇	六八、九八、九九	五九 五、一九、三九	一、一〇、九五、八六	一、一〇三〇
化學工業	一〇 一、一〇	三八、二一、七六	五〇 五、一九、三九	一、一〇、九五、八六	一、一〇三〇
製材及木製品工業	一〇 一、一〇	六八、九八、九九	五〇 五、一九、三九	一、一〇、九五、八六	一、一〇三〇
印刷及製本業	一〇 一、一〇	一、一〇、九五、七〇	五〇 五、一九、三九	一、一〇、九五、七〇	一、一〇三〇
食料品工業	一〇 一、一〇	一、一〇、九五、七〇	五〇 五、一九、三九	一、一〇、九五、七〇	一、一〇三〇
瓦斯及電氣業	一〇 一、一〇	一、一〇、九五、七〇	五〇 五、一九、三九	一、一〇、九五、七〇	一、一〇三〇
其他ノ工業	一〇 一、一〇	一、一〇、九五、七〇	五〇 五、一九、三九	一、一〇、九五、七〇	一、一〇三〇
計	一〇 一、一〇	一、一〇、九五、七〇	五〇 五、一九、三九	一、一〇、九五、七〇	一、一〇三〇

第五六表 (一) 工場數職工數及生產額比較表 (西宮市)

種別	昭和三年		昭和十一年		增加率 生産額
	工場數	生産額	工場數	生産額	職工數
工場數	八 八	一、一〇五〇	一〇 一、一〇五〇	一、一〇五〇	？
生産額	一、一〇五〇	一、一〇五〇	一、一〇五〇	一、一〇五〇	？
職工數	一、一〇五〇	一、一〇五〇	一、一〇五〇	一、一〇五〇	？

先づ大阪市に就て述ぶれば、工場總數昭和三年に於て五、二六二であつたものが昭和十二年に三四、八四一である故二・八倍の激増となり、職工數は昭和三年一五九、五七四人、昭和十二年には二九一、三六〇人なる故一・八倍の増加を示し、生産額は昭和三年九五七、一〇六、〇〇〇圓、昭和十二年二、一四六、〇四一、六九三圓にして、二・二倍の増加となつて居る。全様にして神戸市、尼崎市、

西宮市に就ても全様の比率を擧ぐれば、

第五七表

市名		工場數		職工數		生産額	
		昭和三年	昭和十二年	昭和三年	昭和十二年	昭和三年	昭和十二年
西宮市	尼崎市	神戸市	昭和三年 昭和十二年 增加比率	昭和三年 昭和十二年 增加比率	昭和三年 昭和十二年 增加比率	昭和三年 昭和十二年 增加比率	昭和三年 昭和十二年 增加比率
二元	六八	四〇	一、五四〇	三・一	五・五五五	一・七	一・四八九・五〇一
二五	三〇	三〇	一、三一〇	三・五	八・二四〇	一・七	一・一九二・五五二
二〇	一〇	一〇	一、一五〇	二・九	六・五五九	一・六	一・一八八・八〇〇
一九	九六	九六	一、一五〇	二・〇	八・二七六	一・六	一・一八八・八〇〇
一八	九九	九九	一、一五〇	二・〇	八・二七六	一・六	一・一八八・八〇〇

即ち阪神四都市中尼崎市の工業發展は特に著しく昭和三年、昭和十二年の一〇ヶ年間に於て工場數は三・五倍、職工數三・〇倍生産額は實に五・一倍の増加を示して居る。

して優に三〇億圓を突破する盛況である。之を全國工業生產額一六、四一二、四五三、〇〇〇圓に比する時は一九%を示し、約全國工業生產額の約五分の一は阪神四都市より生產せらるゝ事となり、如何に阪神地方工業の殷盛に赴むきつゝあるか察知し得らるゝのである。

(二) 其他の産業

阪神地方工業が極めて有望なる展開を示しつゝある時、工業以外の産業即ち農産、畜産、林産、水産、鑛産等如何なる状況にあり哉と云ふに、概ね何れも衰勢に赴きつゝあるものと云ふ事が出来るのである。第五八表より昭和三年と昭和十二年とを比較して増産を示すものは唯水産のみである。

第五八表 農産、畜産、林産、水産、鑛産、年産額比較表（太字ハ減少ヲ示ス）

市郡町 名	農		畜		林		水		鑛			
	昭和三年	昭和十二年	増減	昭和三年	昭和十二年	増減	昭和三年	昭和十二年	増減	昭和三年	昭和十二年	増減
村	農	畜	林	水	鑛							
市	農	畜	林	水	鑛							
郡	農	畜	林	水	鑛							
町	農	畜	林	水	鑛							
西	三八〇圓	二〇〇六五圓	一〇九〇〇圓	一〇六九六圓	一〇〇〇〇圓							
神	六六〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
戸	三六〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
崎	二六〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
宮	九六〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
尼	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
津	三〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
西	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
御	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
今	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
大	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
鳴	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
瓦	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
社	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
木	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
尾	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
庄	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
田	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
郷	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
影	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
郷	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
西	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
尼	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
津	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
西	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
道	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
精	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
本	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
住	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
六	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
甲	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
吉	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
山	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
灘	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
計	二四〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
大阪市	三六〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
合	七一四〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							
計	七一四〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓	一〇〇〇〇圓							

但シ大阪市ニ於ケル畜産、林産ハ未發表ニ付掲記セズ

その他の産業の減産を示しつゝあるのは農産、林産、其の他何れも工業の發達に伴ふ工場の増設住宅地の開發等によつて耕地、山林等年々減少しつゝある結果であると推定せらる。之等の生産額を昭和三年、昭和十二年に就き比較すれば昭和三年一三、八六三、七七二圓、昭和十二年一〇、八三四、三三七圓にして昭和十二年は七八%に減少して居る。又水産額を總額より除けば、昭和三年生産額一〇、三一七、六九九圓、昭和十二年生産額は五、〇四九、五〇五圓にして、昭和十二年の昭和三年に對する生産比率は五七%となり衰勢の顯著なるを示して居る。今後工業發展の進むに連れ

て益々之等生産縮小は止むを得ざる事と推定せらるゝのである。

(三) 阪神地方港灣情勢

阪神地方産業の發展は又一に完備せる港灣の所在に負ふ所極めて多く、大阪市、神戸市は勿論尼崎市、西宮市等何れも直接港灣の恩恵に浴して居る。

神戸港は明治三十九年第一期修築工事を起して以來、着々東洋の終端港たるの地歩を堅め我國第一の國際港として目覺ましき發展を遂げたのであつたが、最近隣接大阪港の著しい改善に伴ひ終端港たるの地位は既に大阪港に移りつゝあるの現状である。

しかしそれは兎も角我國第一の生産都市大阪市を擁する大阪港、又中繼港として特殊使命を有する神戸港、兩々我國港灣の雙璧と稱するも過言では無い。

今大阪港、神戸港並びに尼崎港、西宮港に於ける貿易狀況を昭和三年、昭和十二年に就き比較すれば次の如し。

第五九表

港 名	年 別	總額		出貨		入貨	
		數量(噸)	價格(圓)	數量(噸)	價格(圓)	數量(噸)	價格(圓)
大 阪 港	昭和三年	一四、六三、七六四	一、六五、九三	四、二六一、〇三五	一、六五、九三	一〇、三七一、七九	一、二九五、〇五五、七九
	昭和十二年	一〇〇、八七〇、〇三七	一、九三、七八七、四三	六、二五、九三七、三五	一、九三、七八七、三五	三、〇五六、〇五四、八七七	一、二九、九二二、四五八
神 戶 港	昭和三年	一三、四三七、六三	一、六四、五五四、六五	三、七五七、八三三	一、二六八、一四七、九一〇	二、一九三、一六三	一、四〇六、三六六、七三
	昭和十二年	一八、〇〇六、九三三	一、五三、四二一、九〇三	六、三五三、七三五	一、二三一、一七七、七三四	二、一〇一、二三四、一五三	一、一〇一、二三四、一五三
尼 崎 港	昭和三年	八〇八、五五五	一、五三、九三一	五、九三一、八〇一	一、五三、一八三	一、一六三、一〇三	一、一六三、一〇三
	昭和十二年	九、五三一、〇〇八	一、五三、九三一	一、五三、一〇三	一、五三、一〇三	一、一六三、一〇三	一、一六三、一〇三
西 宮 港	昭和三年	五、五〇、九三三	一、五三、三一六、九三一	一、五三、三一六、九三一	一、五三、三一六、九三一	一、六六、三三三	一、六六、三三三
	昭和十二年	一、五三、〇三一	一、五三、四四九、九三三	一、五三、四四九、九三三	一、五三、四四九、九三三	八、一八九、九三三	八、一八九、九三三
	昭和三年計	一八、四一〇、九一九	五、五〇三、六三、四三四	一、五三、一〇三	一、五三、一〇三	三〇、三三三	三〇、三三三
	昭和十二年計	九、一〇六、〇三六	一、五三、一〇三	一、五三、一〇三	一、五三、一〇三	一五、七九九、〇八九	一五、七九九、〇八九

即ち右表によつて明確なる如く、各港共貿易數量、貿易額共飛躍的發展を爲しつゝある事が看取せられる。四港貿易總額を昭和三年、昭和十二年に於て比較する時は一〇年間に噸量に於て約二・

一倍、金額に於ても約二・〇倍の激増となつて居る。昭和十二年度に於ける全國港灣輸移出入總額を見るに貨物總噸數二五五、一七九、五一二噸、貨物總價格二六、六四〇、〇三二、八三六圓にして、阪神四港の輸移出入貨物噸數、價格を之と比較する時は噸數に於て約二三%，價格に於て實に約四三%の多きを占むるのであつて、如何に後方地域の産業殷盛にして之が聯絡至便なるかを察知せしむる。

第六章 結 言

以上四章に涉つて述べた處により、如何に阪神國道の効果顯著なるかを知り得たるが、更に現在を見て將來を考ふる参考として、八圖に示す如く、神崎大橋南詰に於ける車輛通過數の推定増加量（單純なる計算を以て複雑な將來を豫測する譯には行かぬが一推定として掲げる）を直線と見て、昭和二十年には貨物自動車一日約一三、八〇〇台、乗用自動車一日約八、四〇〇台、よつて自動車合計一日約二二、二〇〇台となる。昭和十一年に於ては自動車通過數一日約一二、〇〇〇台であるから之を阪神國道の飽和量と見れば、昭和二十年には現阪神國道に等しい抱擁力を有する路線が更に一本絶對的に必要となる譯である。現に大阪府、大阪市に於て施工されつゝある大阪市内河川改修工事、及大阪港修築第二期工事は昭和二十一年に完成の豫定であるが、工事完成の曉には、築港、河川合計一年に約五、〇〇〇萬噸の貨物を取扱ひ得る計畫である。昭和十年大阪港が取扱つた貨物は約二、五〇〇萬噸であるから昭和二十一年には昭和十年の二倍の貨物を取扱ひ得る事になる。神戸港も亦着々將來に備へて計畫を實施しつゝあるのである。かくの如く阪神地方の底止する所を知

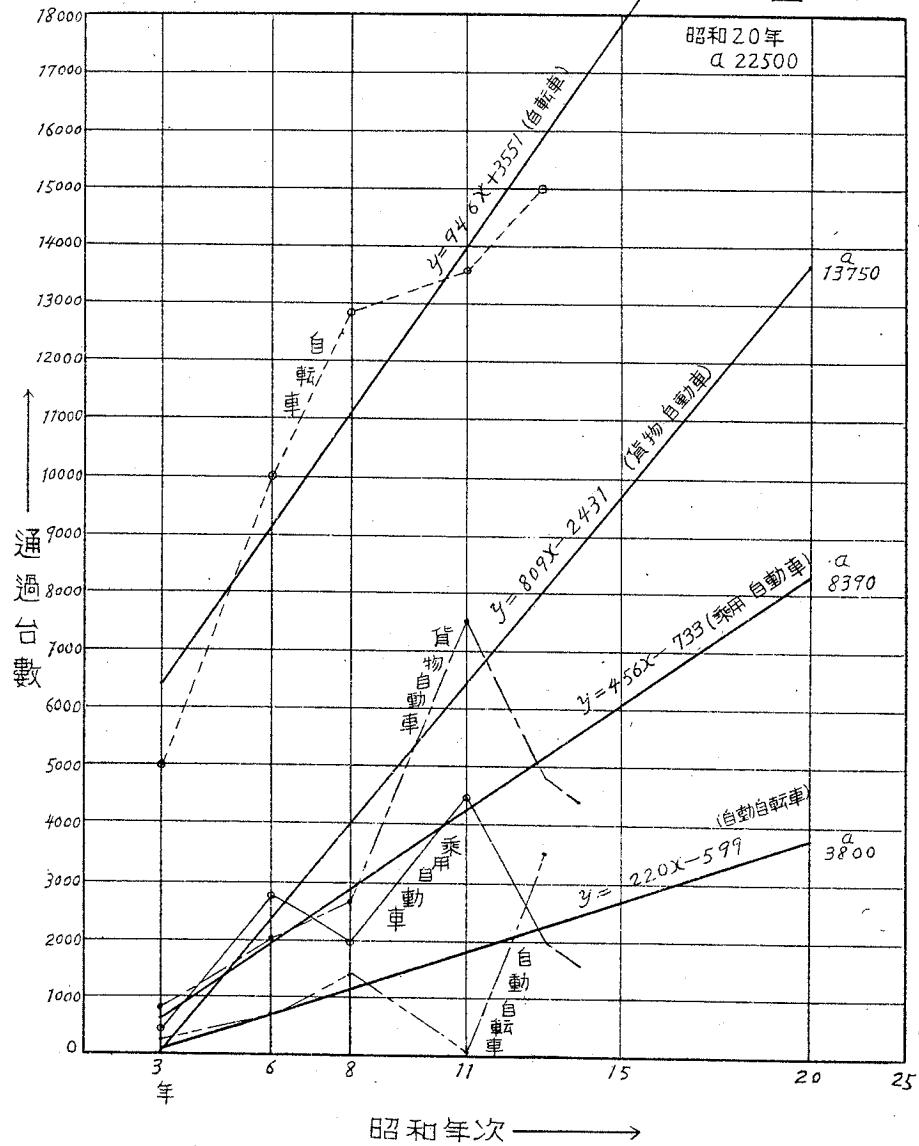
らざる商工業の發展に伴ひ、最も重大なる役割を果すべき阪神間道路問題の解決は國策として是を促進し實行に移すの必要を痛感して筆を擱く。

八〇

圖定推加數過通輛車

諸南橋大崎神

圖八第



昭和十五年五月一日印刷
昭和十五年五月五日發行

内務省大阪土木出張所

大阪市西區土佐堀通三丁目

印刷者 中川松吉
大坂市此花區上福島北二ノ八八
印刷所 中川印刷所
大坂市此花區上福島北二ノ八八